

2023 年 1 月

食料安全保障月報

(第 19 号)



令和 5 年 1 月 31 日

農林水産省

食料安全保障月報について

1 意義

我が国は食料の大半を海外に依存していることから、主食や飼料原料となる主要穀物(コメ、小麦、とうもろこし)及び大豆を中心に、その安定供給に向けて、世界の需給や価格動向を把握し、情報提供する目的で作成しています。

2 対象者

本月報は、2021年6月まで発行していた海外食料需給レポートに食料安全保障の観点から注目している事項を適宜追加する形で、国民のみなさま、特に、原料の大半を海外に依存する食品加工業者及び飼料製造業者等の方々に対し、安定的に原料調達を行う上での判断材料を提供する観点で作成しています。

3 重点記載事項

我が国が主に輸入している国や代替供給が可能な国、それに加えて我が国と輸入が競合する国に関し、国際相場や需給に影響を与える情報（生育状況や国内需要、貿易動向、価格、関連政策等）について重点的に記載しています。

4 公表頻度

月1回、月末を目処に公表します。

2023 年 1 月食料安全保障月報（第 19 号）

目 次

概要編

I	2023 年 1 月の主な動き	1
II	2023 年 1 月の穀物等の国際価格の動向	4
III	2022/23 年度の穀物需給（予測）のポイント	4
IV	2022/23 年度の油糧種子需給（予測）のポイント	4
V	今月の注目情報「米国の穀物等の生産・輸出動向」	5

（資料）

1	穀物等の国際価格の動向	9
2	穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移	10
3	穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、品目別）	11
4	加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の状況	13
5	食品小売価格の動向	17
6	海外の畜産物の需給動向（ALIC 提供）	18
7	FAO 食料価格指数	20

品目別需給編

I	穀物	
1	小麦	1
	＜米国＞ 2023/24 年度の冬小麦の播種面積は 8 年間で最大	
	＜カナダ＞ 2023/24 年度の小麦全体の生産量は、34.3 百万トンと増加の見込み	
	＜豪州＞ 収穫がほぼ終了、生産量は史上最高の 36.6 百万トン	
	＜EU27+英国＞ 増加した EU27 の輸入量の多くはウクライナ産	
	＜中国＞ カナダ産小麦の輸入が増加	
	＜ロシア＞ 2023 年 2 月 15 日から同年 6 月 30 日まで穀物輸出枠 2,550 万トン	
	＜ウクライナ＞ 生産量は前月予測から上方修正も、前年度比 36.4%減少の 21.0 百万トン	
2	とうもろこし	9
	＜米国＞ 生産量は収穫面積・単収減少により減産、輸出減の見通し	
	＜ブラジル＞ 生産量は史上最高、輸出増の見通し	
	＜アルゼンチン＞ 干ばつが生産量に影響を与える懸念（輸出税継続）	
	＜中国＞ 生産量、消費量ともに史上最高、輸入量減少の見通し	
	＜ウクライナ＞ ロシアによる侵攻により、輸出量は前年度より 24%減	
3	コメ	15
	＜米国＞ 生産量減少により長粒種の価格が更に上昇、輸出量は減少	
	＜インド＞ ラビ米の作付けは前年度よりも速いペースで進捗	

- <中国> 南部の干ばつ等で減産
- <タイ> 東南アジアや中東向けの輸出が好調
- <ベトナム> 秋冬作の収穫終了による供給減少等から価格が上昇

II 油糧種子

- 大豆・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2 1
- <米国> 生産量は減産、輸出減の見通し
- <ブラジル> 生産量、輸出量ともに史上最高の見通し
- <アルゼンチン> 干ばつが生産量に影響を与える懸念（輸出税継続）
- <中国> 生産量、消費量は史上最高、輸入量も増加見通し
- <カナダ> 収穫面積は減少も、単収の増加により増産

（参考 1）本レポートに使用されている各国の穀物年度について（2022/23 年度）・・・ 2 7

（参考 2）単位換算表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2 7

【利用上の注意】

表紙写真：豪州 サウスオーストラリア州の小麦圃場の小麦の収穫（1 月 6 日撮影）
 サウスオーストラリア州では、天候に恵まれ収穫が順調に進展した。
 豪州では史上最高の小麦生産量（3, 660 万トン）が見込まれている。

(概要編)

I 2023 年 1 月の主な動き

主要穀物等の需給・相場等について

主要穀物等の 2022/23 年度の作況については、北半球での収穫はほぼ終了し、南米では生育期を迎えている。

品目別にみると、1月の米国農務省（USDA）の需給報告では、小麦については、世界の生産量が前年度より増加する見通し。ロシアのウクライナ侵攻に関連し、前年3月には過去最高を更新した国際相場も侵攻前の水準まで戻したものの、引き続き高水準で推移している。前年7月のウクライナの穀物輸出に関する4者合意は2023年3月19日まで延長されたが、今後も注視が必要。

とうもろこしについては、米国や欧州の乾燥等の影響により、世界の生産量が前年度より減少する見通し。一方、大豆については、米国は減産も、ブラジルで増産となり、世界では増産となる見通し。いずれの品目も旺盛な消費により期末在庫は依然としてタイトな状況であり、引き続き注視する必要。

FAO（国連食糧農業機関）が公表している食料価格指数（最新値：12月）については、11月から下落（135.0→132.4）しているものの、引き続き高い水準を維持（参考：前年12月の値は133.7、前々年12月の値は108.6）。

海上運賃については、バルチック海運指数（穀物輸送等に使用される外航ばら積み船の運賃指数）が、直近5カ年の平均値の4割程の水準で推移。

早期注意段階の継続について

現状において、我が国の食料の安定供給に懸念は生じていないものの、上記の状況を踏まえ、2021年7月から適用を開始した、緊急事態食料安全保障指針に基づく「早期注意段階」については、2023年1月も引き続き適用。

【参考】早期注意段階について（農林水産省HP）

<https://www.maff.go.jp/j/zyukyu/anpo/soukichuui.html>



ウクライナの生産・輸出動向

ウクライナ農業政策食料省の1月20日報告によると、2022/23年度の小麦は収穫が終了し、収穫予定面積のほぼ100%に当たる2,020万トンが収穫された。遅れていたとうもろこし等の夏作物も収穫が終盤となり、とうもろこしは収穫予定面積の87%に当たる2,440万トンが収穫された。

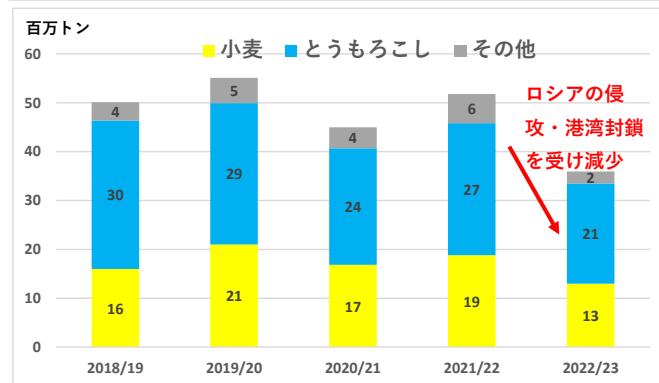
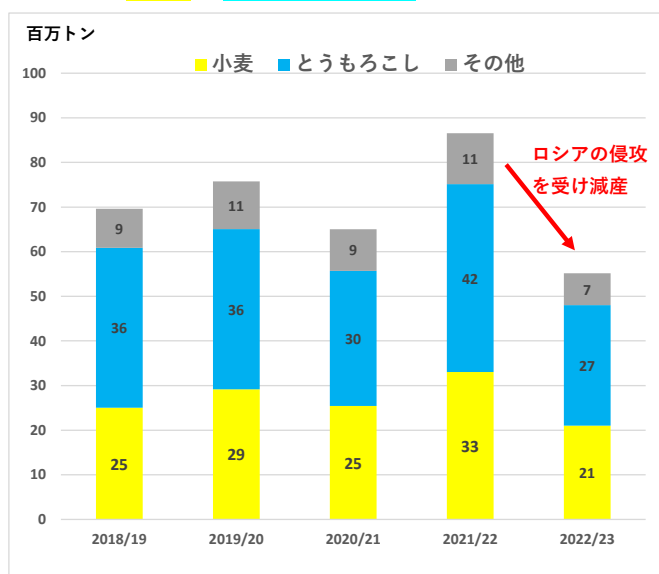
2023/24年度の冬小麦の作付けは、2022年11月28日報告によると計画の94%に当たる380万ヘクタールが終了した。

2022年7月22日の国連、ウクライナ、ロシア、トルコの4者によるウクライナ産穀物の黒海経由での輸出再開に関する合意（当初11月19日まで）を受け、8月以降、オデーサ港等3港からの輸出が再開され、さらに、11月には2023年3月19日まで延長された。2022年12月31日時点で、輸出量は1,631万トン（うち、とうもろこし740万トン、小麦464万トン他）。目的地はスペイン、中国、トルコ、イタリア等。

米国農務省（USDA）の1月見通しによれば、2022/23年度の小麦の生産量は、前月見通しから50万トン上方修正され2,100万トン（対前年度比36%減）、輸出量は前月から50万トン上方修正され1,300万トン（同31%減）の見通し。

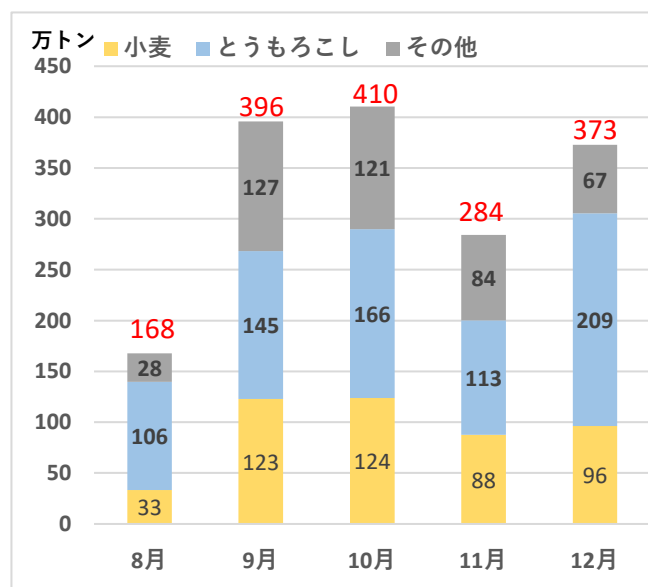
一方、とうもろこしの生産量は、前月見通しから変更なく、収穫期の降雨過多やロシアの攻撃による収穫遅れにより2,700万トン（同36%減）、輸出量は、前月見通しから300万トン上方修正され2,050万トン（同24%減）の見通し。

（参考1）小麦ととうもろこしの生産量(上)、輸出量(下)の推移（年度）



出典：米国農務省「PS&D」（2023.1） 注：その他は他の穀物（大麦等）

（参考2）黒海からの輸出量の推移（月毎）



注：その他はひまわり油・大麦など陸路による輸出を除く。

1 ブラジルの夏とうもろこし、大豆の生育は降雨に恵まれ順調

夏とうもろこし、大豆については、南部は乾燥の影響を受けているが、北部から主産地のマットグrosso州を含む中西部にかけて降雨に恵まれ、おおむね順調に生育している。ブラジル食料供給公社（CONAB）の1月見通しによれば、大豆は1億5,270万トン（21.6%増）の生産見通し。とうもろこしは現在生育中の夏とうもろこし2,650万トンと大豆収穫後に作付けされる冬とうもろこし9,860万トンの合計で1億2,510万トン（10.5%増）の見通し。

2 アルゼンチンの穀物は乾燥の影響で減産見通し

ブエノスアイレス穀物取引所の1月12日及び19日の見通しでは、小麦は収穫が終了したが、乾燥の影響で生産量は、1,240万トン（前年度2,240万トン）と大きく減少する見通し。とうもろこし、大豆については、降雨不足で大幅に作付けが遅れ、生産量はそれぞれ4,450万トン（同5,200万トン）、4,100万トン（同4,300万トン）と前年度より減少する見通し。

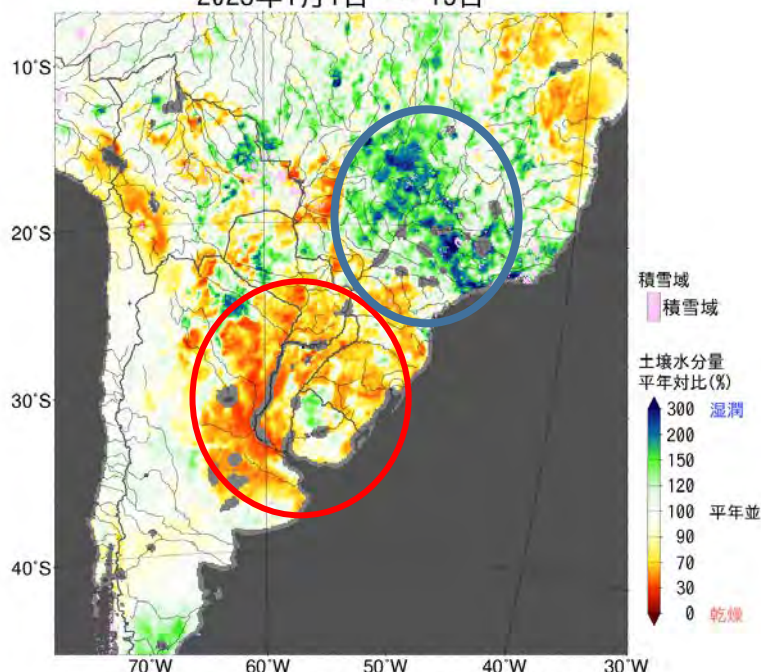
輸出規制等に関し、大豆には、輸出促進の為替レートの設定は12月で終了し、大豆の輸出税は33%で維持も、一時的に引き上げられていた大豆油と油かすの輸出税は31%に引き下げられ、とうもろこし、小麦については12%を維持している。

（参考）1月前半の南米の土壌水分量平年対比（JASMAI）

ブラジル北部から中西部にかけ水分量が多く（青丸）

ブラジル南部からアルゼンチンにかけて少ない（赤丸）

2023年1月1日～15日



注：JAXA/AMSR2/AMSR-E土壌水分量プロダクト、JASMES積雪分布プロダクトを加工して作成

3 ロシアは史上最高の豊作も2月15日から6月末まで穀物輸出枠2,550万トン設定

米国農務省（USDA）の1月見通しによれば、ロシアの2022/23年度の穀物生産見通しは史上最高の1億3,250万トン（前年度比16%増）。そのうち、小麦は9,100万トン（同21%増）で史上最高となり、大麦は2,100万トン（同20%増、史上最高）、とうもろこしは1,400万トン（同8%減）、コメは52万トン（同26%減）の見通し。

一方、ロシア政府は2022年12月30日に、2023年2月15日から6月30日まで2,550万トンの穀物輸出枠の設定を決定した。小麦、とうもろこし、大麦、ライ麦が含まれるが穀物別の割当は設定されていない。ただし、前年度同時期の輸出枠（小麦800万トン、とうもろこし、大麦、ライ麦計で300万トン）より大幅に増加している。なお、今まで課せられてきた輸出税は並行して課せられる。また、コメについては前年度に実施されていた輸出禁止が本年6月30日まで延長された。

Ⅱ 2023 年 1 月の穀物等の国際価格の動向

小麦は、前年12月末、290ドル/トン台前半で推移。1月に入り、ロシア等の黒海諸国からの小麦供給が潤沢なことや、豪州の豊作、ドル高から260ドル/トン台後半に値を下げたものの、米国冬小麦産地での作柄の悪化やとうもろこし価格の上昇への追随から270ドル/トン台半ばに値を上げた。その後、米国産小麦の輸出需要の低迷見込みやアルゼンチンでの降雨予報による大豆、とうもろこし価格の低下への追随から値を下げ、1月下旬現在、270ドル/トン台前半で推移。

とうもろこしは、前年12月末、260ドル/トン台後半で推移。世界的な景気後退による需要低迷への懸念、原油価格の下落やドル高等から、1月上旬に250ドル/トン台後半まで値を下げた。その後、アルゼンチンの高温・乾燥による作柄悪化懸念の一方、米国産の低調な輸出状況から、1月中旬までほぼ横ばいで推移。USDAの1月報告で米国、アルゼンチン等の生産見通しの下方修正等を受け、値を上げたが、アルゼンチンでの降雨予報により一時値を下げ、1月下旬現在、260ドル/トン台後半で推移。

コメは、前年12月末、490ドル/トン台前半で推移。1月に入り、更なるバーツ高や、インドネシアによる政府備蓄不足の回復のためのタイからの輸入増に加え、中東諸国からの需要増等により値を上げ、1月中旬現在、530ドル/トン台後半で推移。

大豆は、前年12月末、550ドル/トン台後半で推移。世界的な景気後退による需要低迷への懸念、原油価格の下落やドル高等から、1月上旬に540ドル/トン前後まで値を下げた。その後、アルゼンチンの高温・乾燥による作柄悪化懸念に加え、USDAの1月報告で米国の生産見通しの下方修正等を受け、値を上げたが、アルゼンチンでの降雨予報により一時値を下げ、1月下旬現在、550ドル/トン台前半で推移。

(注) 小麦、とうもろこし、大豆はシカゴ相場（期近物）、米はタイ国家貿易委員会価格

Ⅲ 2022/23 年度の穀物需給（予測）のポイント

世界の穀物全体の生産量は、前月予測から 680 万トン下方修正され 27.3 億トン。消費量は、前月予測から 700 万トン下方修正され 27.6 億トンとなり、生産量が消費量を下回る見込み。

期末在庫率は前年度を下回り 27.5%となる見込み（資料2参照）。

生産量は、前月予測から、小麦で上方修正も、とうもろこし、コメで下方修正され、穀物全体で下方修正され、27.3 億トンの見込み。

消費量は、前月予測から、小麦で上方修正も、とうもろこし、コメで下方修正され、穀物全体で下方修正され、27.6 億トンの見込み。

貿易量は、前月予測から、小麦、コメで上方修正も、とうもろこしで下方修正され、4.8 億トンの見込み。

期末在庫量は、7.6 億トンと前月予測から上方修正、期末在庫率は、前月予測から上方修正された。

(注：数値は1月のUSDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」による)

Ⅳ 2022/23 年度の油糧種子需給（予測）のポイント

油糧種子全体の生産量は前年度を上回り 6.4 億トン。消費量は前年度を上回り 6.3 億トンとなり、生産量が消費量を上回る見込み。

期末在庫率は前年度を上回り、19.3%となる見込み。

(注：数値は1月のUSDA「Oilseeds: World Markets and Trade」による)

V 今月の注目情報：米国の穀物等の生産・輸出動向

2022/23年度の米国の穀物・大豆生産については、夏季の高温乾燥の影響等を受け、ほぼ前年度並みの小麦を除き、とうもろこし、大豆、コメなどが減産となった。また、輸出について、減産に加え、ブラジルや豪州、ロシアなどの豊作見通しから伸び悩んでいる。さらに乾燥の影響を受けたミシシッピ川などの水位低下によるはしけ運賃の高騰などの懸念材料もある。今後の見通しも含め、米国の穀物等の生産と輸出動向、期末在庫率、世界の穀物需給への影響についてまとめた。

注：文中の「2022/23 年度」等は穀物年度で、米国の小麦は 2022 年 6 月から 2023 年 5 月。国や作物によって異なる(品目別需給編 P. 27 参照)。

1. 生産量

表 過去 10 年間の米国の小麦、とうもろこし、大豆の生産量

単位：百万トン、%

	2013/14	2014/15	2015/16	2016/17	2017/18	2018/19	2019/20	2020/21	2021/22	2022/23	対前年度比
小麦	58.1	55.1	56.1	62.8	47.4	51.3	52.6	49.8	44.8	44.9	0.2
とうもろこし	351.3	361.1	345.5	384.8	371.1	364.3	346.0	358.4	382.9	348.8	-8.9
大豆	91.4	106.9	106.9	116.9	120.1	120.5	96.7	114.7	121.5	116.4	-4.2

赤太字は過去10年で一番少ない年、青太字は過去10年で一番多い年、赤、青細字はそれぞれ2番目

出典：米国農務省「PS&D」(2023.1)を農林水産省で加工

れ、小麦全体で、前年度を0.2%上回る4,490万

トンとなった。直近10年間でみると最も生産量が少ない前年度に次ぐ低水準。内訳をみると、冬小麦は3,004万トン(前年度比13.6%減)、春小麦は1,312万トン(同45.7%増)、デュラム小麦は174万トン(同69.9%増)となった。冬小麦は、主要生産地の干ばつの影響で前年度に比べ生産量が減少した一方、春小麦、デュラム小麦は、降雨過多による播種遅延があったものの、その後は天候に恵まれ、乾燥により減少した前年度から生産量は回復した。

なお、2023/24年度の冬小麦については、穀物価格の上昇から作付面積が大きく増加し、対前年度比11%増、過去8年間で最高の1,495万ヘクタールとなった。現在、越冬期で乾燥の懸念はあるものの、雪解け後の春の天候が単収決定に大きな影響を与えるとみられる。

(2) とうもろこし

収穫面積の減少(対前年度比7.2%減)に加え、夏季のコーンベルトの一部での高温・乾燥により単収が低下(同1.9%減)したことから、生産量は2021/22年度(史上2位)と比べ8.9%減の3億4,875万トンとなった。USDAの1月報告では、収穫面積の下方修正により、前月見通しから510万トン下方修正された。直近10年間でみると、2015/16年度、2019/20年度に次ぐ低水準。

(3) 大豆

収穫面積は前年度からわずかに増加したものの、夏季のコーンベルトの一部での高温・乾燥により単収が低下(同4.3%)したことから、生産量は前年度比4.2%減の1億1,638万トンとなった。USDAの1月報告では、単収及び収穫面積の下方修正により、前月見通しから190万トン下方修正された。直近10年間でみると5位と平均を少し上回る水準である。

(4) コメ

米国での生産量は小麦等の作物と比較して少ないが、長粒種・中短粒種合計で前年度比16.3%減の509万トン(精米トン)となり、1993/94年度以来29年ぶりの低水準。コメ生産の大半を占めるミシシッピ川下流域で栽培される長粒種については、大豆やその他作物の収益性が良いことから作付けがシフトし、前年度比11.5%減の407万トン。また、カリフォルニア州などで主に栽培される中・短粒種については、干ばつによる灌漑用水の不足から収穫面積が減少し、生産量は前年度比31.5%減の102万トン。

2 輸出動向と期末在庫率

(1) 小麦

USDA の 1 月見通しによれば、2022/23 年度の輸出量は、前年度比 3.2% 減の 2,109 万トンの見込み。米国産小麦の最近 2 年間の生産量の減少に加え、ロシア、ウクライナ等の黒海諸国や豪州など他の輸出国と比べ輸出価格が高いこともあり、輸出が伸び悩んでいる。

期末在庫率はここ 2 年間の減産に伴い低下しており、29.8% と 9 年ぶりの低水準である。

(2) とうもろこし

USDA の 1 月見通しによれば、2022/23 年度の輸出量は、前年度比 22.1% 減の 4,890 万トンの見込み。2022/23 年度の減産に加え、ミシシッピの水位低下による国内運賃の高騰、ブラジルの増産などから輸出競争力が乏しいことも背景にあるとみられる。

期末在庫率は、輸出が 2020/21 年度、2021/22 年度と、好調であったことや、2022/23 年度の減産などにより、

過去 3 年間連続で 10% を下回る低水準で推移しており、2022/23 年度は 8.9% と過去 10 年間で 2 番目に低い水準（2020/21 年度の 8.3% が最低）。

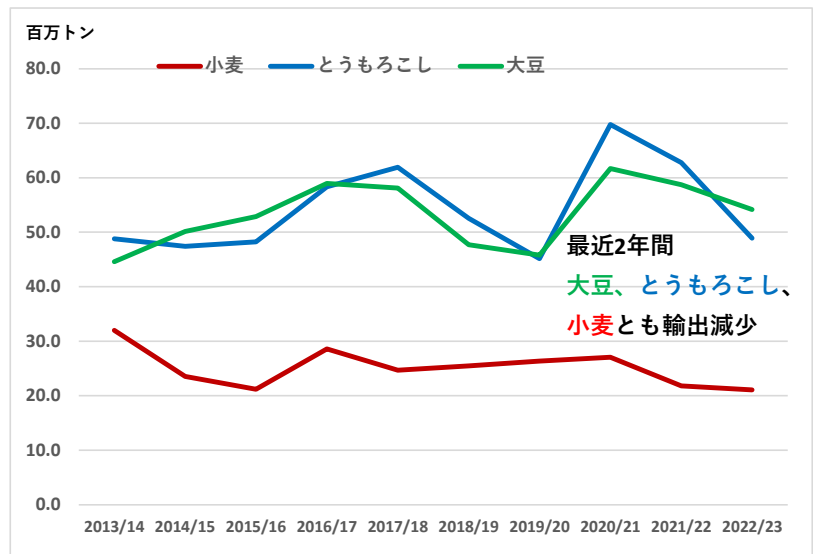
(3) 大豆

USDA の 1 月見通しによれば、2022/23 年度の輸出量は、前年度比 7.8% 減の 5,416 万トンの見込み。2022/23 年度の減産に加え、とうもろこし同様、ミシシッピの水位低下による国内運賃の高騰、ブラジルの増産などから輸出競争力が乏しいことも背景にあるとみられる。期末在庫率は、国内需要増などにより 2019/20 年度以降低下し、2022/23 年度は 4.8% と 2013/14 年度以来 9 年ぶりの低水準。

(4) コメ

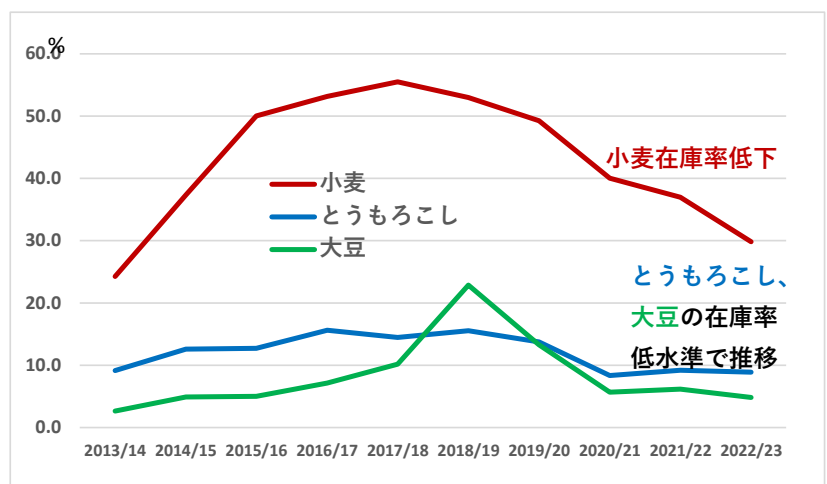
生産量の減少などからここ 3 年間連続で輸出量は減少しており、特に 2022/23 年度は大幅に減少して、210 万トンと、1985/86 年度以来 37 年ぶりの低水準。他方で、2022/23 年度の輸入量は 143 万トンと過去最高の見通し。

図 1 過去 10 年の米国の小麦、とうもろこし、大豆の輸出量の推移



出典：米国農務省「PS&D」（2023.1）を農林水産省で加工

図 2 過去 10 年の米国の小麦、とうもろこし、大豆の期末在庫率の推移



出典：米国農務省「PS&D」（2023.1）を農林水産省で加工

3 米国の穀物輸出と国際貿易の状況

(1) 小麦

主要輸出国では、豪州、ロシアで史上最高の豊作が見込まれている。カナダでも干ばつだった前年度から輸出量は大きく回復し、EUでも小麦は干ばつの影響を免れた。このような主要輸出国の豊作見通しやウクライナからの輸出再開を受け、国際相場は、ウクライナ侵攻前の水準まで下落した。米国产は輸出価格が高く、輸出は伸び悩んでいる。

主要輸入国では、ウクライナからの輸入が多かったエジプトは、国内産の増産により輸入は減少しており、不足分はロシアからの代替輸入を増加させている。インドネシアは、ウクライナ産の代替として豪州産の手当てを増加させている。両国とも 2022/23 年度の輸入量は 1,100 万トン(以下 USDA 見通し)で世界最大の小麦輸入国。

中国は、安価で低たんぱくの豪州産を中心に輸入してきたが、高たんぱくの小麦を中心に米国产、カナダ産の輸入を行うとみられている。輸入量は、2020/21 年度は、畜産需要増により 1,062 万トンまで増加したが、それ以降、輸入量は伸び悩み、2022/23 年度は国内産小麦が史上最高の豊作で小麦の備蓄が十分にあるとみられており、950 万トンの輸入の見通し。

トルコは、前年の 7 月にはウクライナの黒海穀物輸出の仲介役を担い、ウクライナ産を中心に小麦輸入を 1,000 万トンに増加させ、世界第 3 位の小麦輸入国となる見通し。

図 3 主要小麦輸出国の輸出量の推移

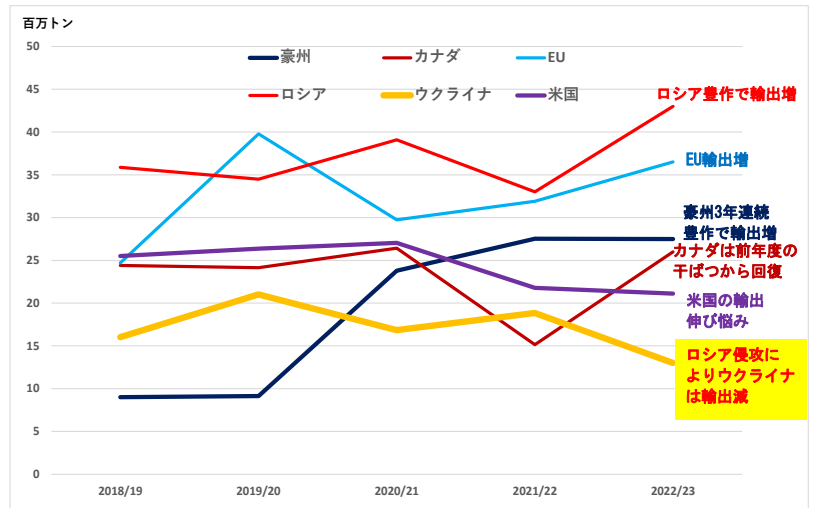


図 4 主要小麦輸入国の輸入量の推移（我が国は 11 位）

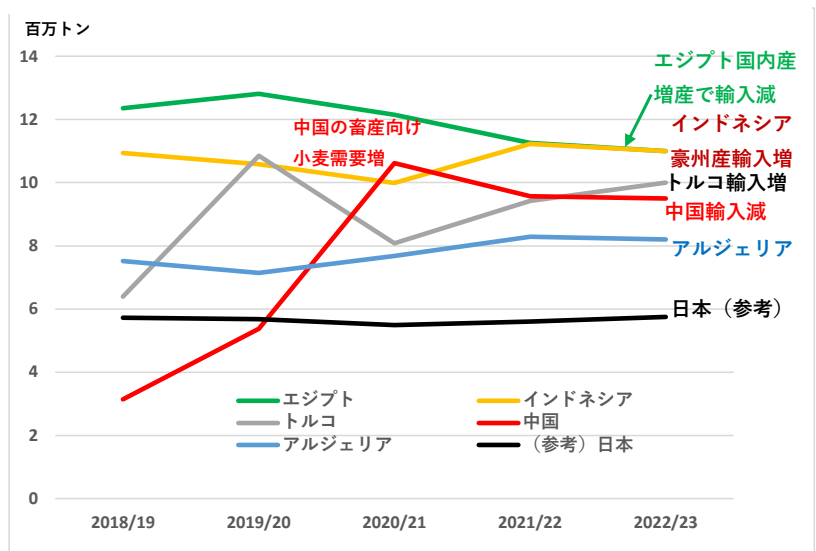
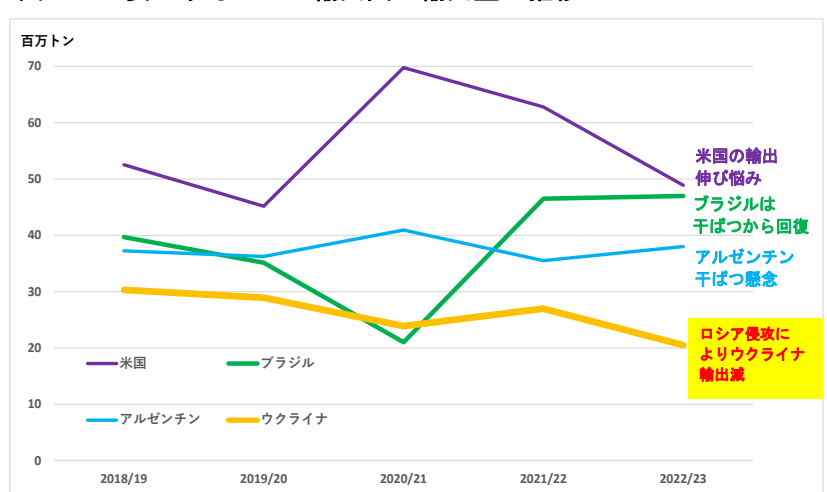


図 5 主要とうもろこし輸出国の輸出量の推移



(2) とうもろこし

主要輸出国では、小麦と同様、ウクライナの輸出量がロシアの侵攻により減少、米国でも高温乾燥による減産や輸出価格上昇で輸出が伸び悩んでいる。

一方、ブラジルでは、2021/22年度の冬とうもろこしが豊作、2022/23年度も豊作見通しを受け輸出増加の見通し。

生育期を迎えているアルゼンチンでは、60年に一度ともいわれる干ばつが報じられており、今後とも乾燥が継続する場合、輸出量が減少する恐れがある。

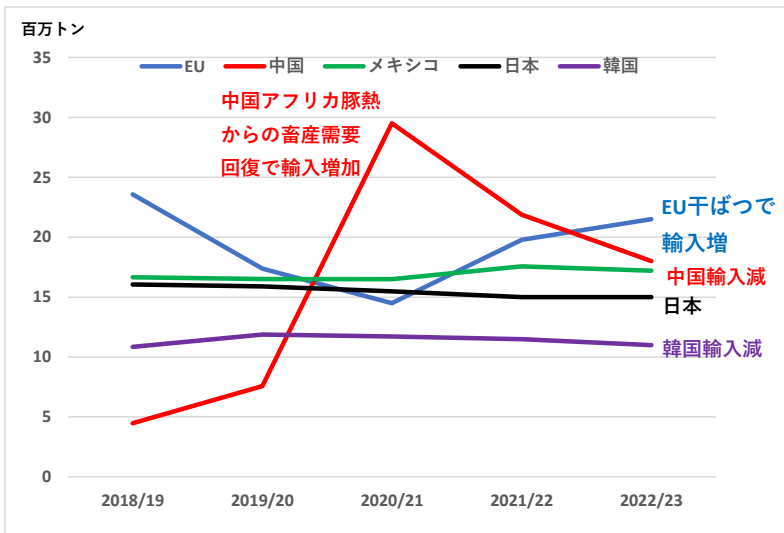
主要輸入国では、夏季の干ばつによりとうもろこしが大きく減産となった EU の 2022/23 年度の輸入量（2,150 万トン）が中国の輸入量（1,800 万トン）を上回る見通し。EU は非 GMO とうもろこしを生産しているウクライナ産の輸入を黒海経由に加え、陸路輸送等により増加させた。一方、中国は、米国産の輸入に加え、ウクライナ産を 2021 年は黒海経由で 800 万トン輸入していたが、2022 年は米国やウクライナ産の輸入が減少となった一方で、前年 11 月からブラジル産の輸入を開始した。

(3) 大豆

輸出国では、米国が 2022/23 年度の減産に伴い、輸出が低調となる見通し。これに対し、ブラジルでは主産地のマット・グロソ州などで適度な降雨に恵まれ、生産量の見通しは 1 億 5,000 万トンを超えることから、輸出量は前年度より大幅に増加し、米国の輸出量の減少分を補ってさらに余りある見通しで、世界の輸出量合計も増加する見通し。また、アルゼンチンはとうもろこし同様、干ばつの影響により輸出減少となる恐れがある。

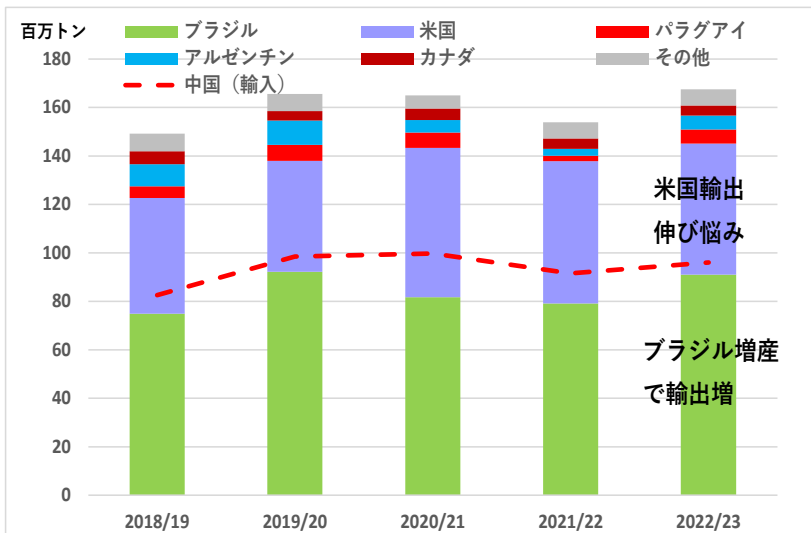
世界最大の輸入国である中国の 2022/23 年度の大豆生産量が 2,030 万トンと史上最高の豊作となったことから、輸入量は USDA の 1 月見通しで 200 万トン下方修正され、9,600 万トンの見通し。なお、本年 1 月 8 日からゼロコロナ政策の解除を行ったことから一時的に感染者は増加している模様であるが、穀物貿易関係者の中では、今後、大豆を始め穀物需要が回復するとの見方もある。また、1 月 17 日の国家統計局の 2022 年のレポートでは、中国の経済成長の鈍化や 61 年ぶりの人口の減少などが公表された。これらが長期的に、今後の大豆を始めとする中国の穀物需要や輸入にどのような影響を与えるか引き続き注視する必要がある。

図 6 主要とうもろこし輸入国の輸入量の推移（我が国は 4 位）



出典：米国農務省「PS&D」（2023.1）を農林水産省で加工

図 7 主要大豆輸出国の輸出量の推移（参考：中国は輸入量）

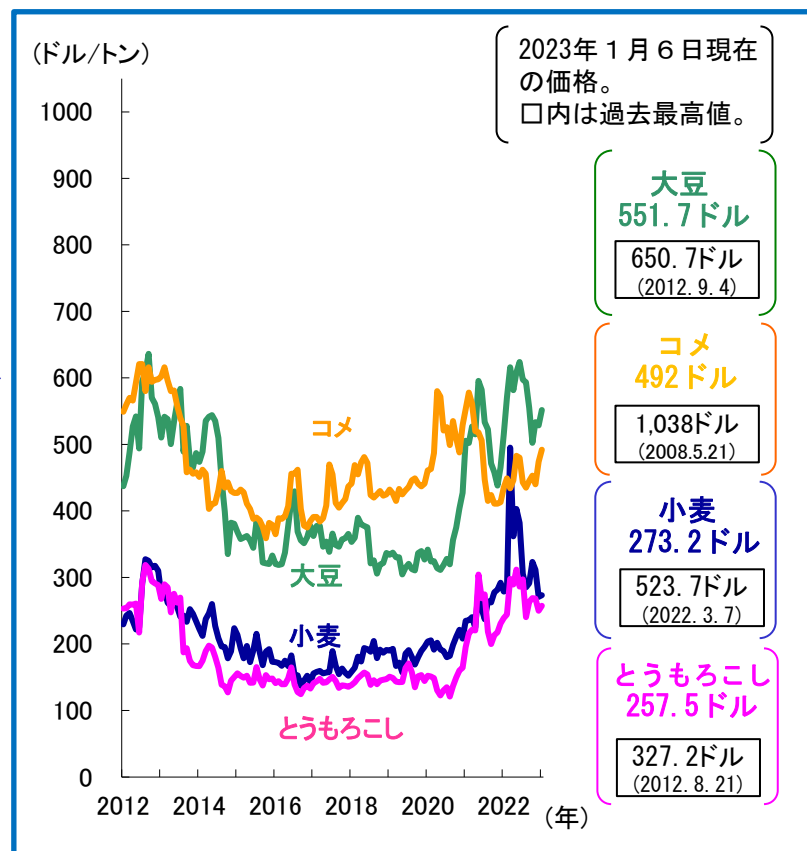
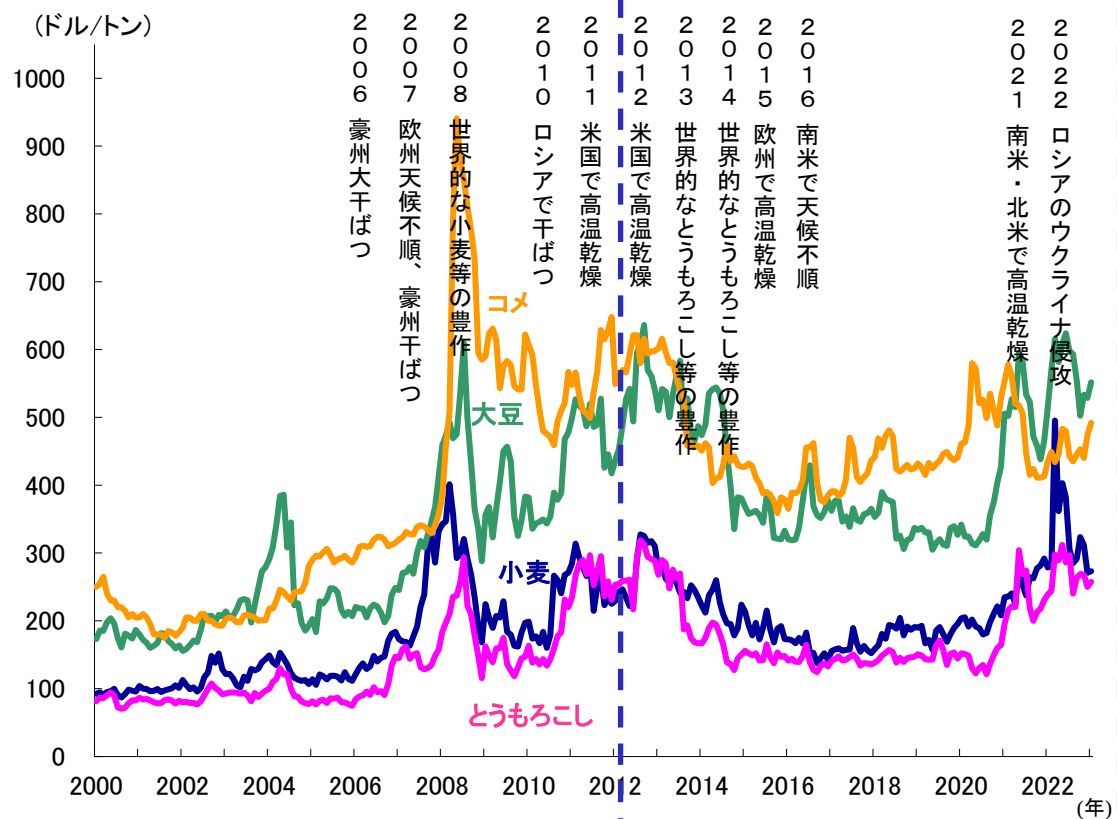


出典：米国農務省「PS&D」（2023.1）を農林水産省で加工

資料 1 穀物等の国際価格の動向（ドル/トン）

- とうもろこし、大豆が史上最高値を記録した2012年以降、世界的な豊作等から穀物等価格は低下。2017年以降ほぼ横ばいで推移も、2020年後半から南米の乾燥、中国の輸入需要の増加、2021年の北米の北部の高温乾燥等により上昇。2022年に入り、ウクライナ情勢が緊迫化する中、小麦は史上最高値を更新。コメは、2013年以降低下も2020年ベトナムの輸出枠設定や2021年初頭のコンテナ不足等で一時的に上昇。2021年2月半ばから海外需要低迷で低下。
- 穀物等価格は、新興国の畜産物消費の増加を背景とした堅調な需要やエネルギー向け需要に加え、ウクライナ情勢により、2008年以前を上回る水準で推移。

□ 穀物等の国際価格の動向



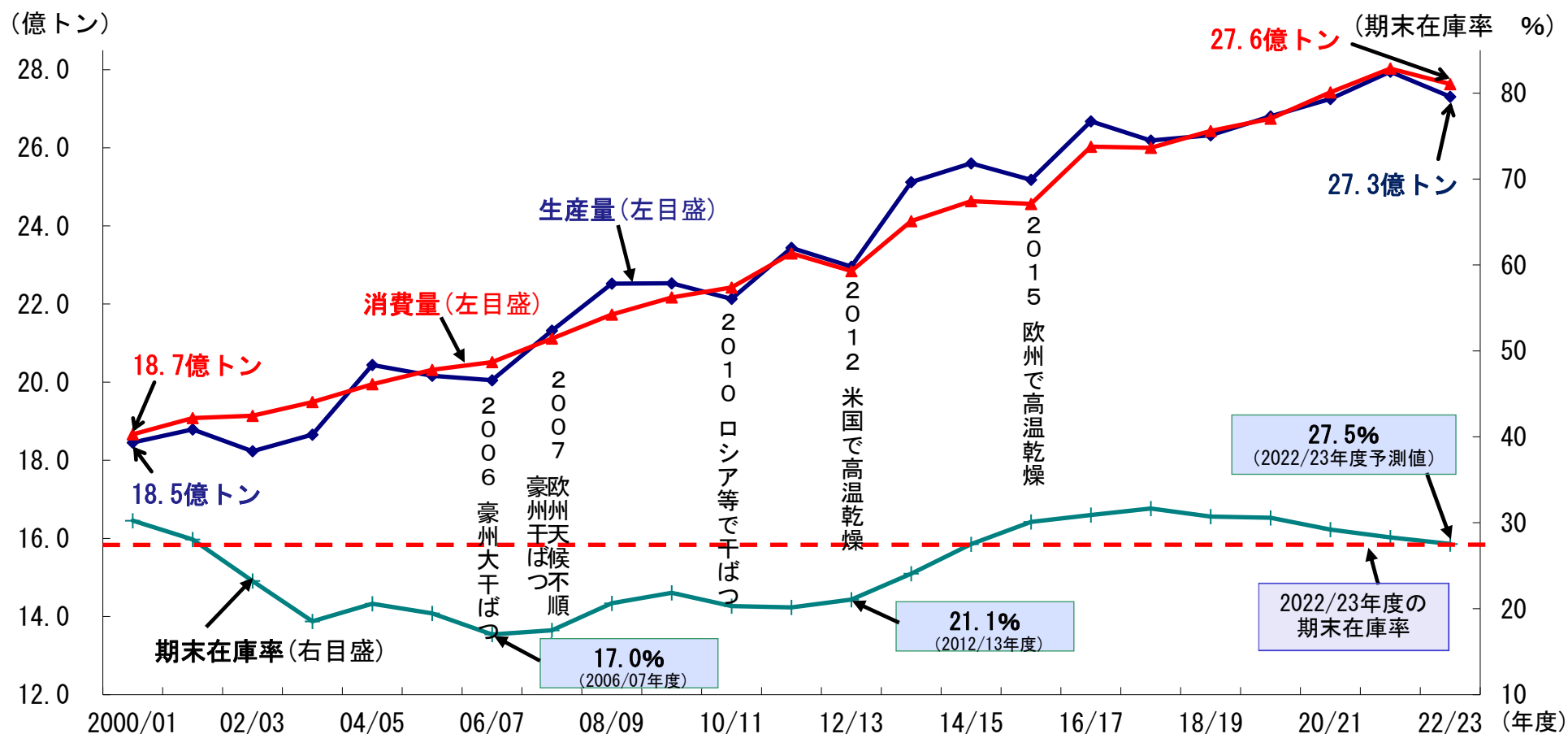
注1：小麦、とうもろこし、大豆は、シカゴ商品取引所の各月第1金曜日の期近終値の価格（セツルメント）である。コメは、タイ国家貿易取引委員会公表による各月第1水曜日のタイうるち精米100%2等のFOB価格である。なお、2023年第1水曜日のコメ価格は未公表のため、2022年12月21日の価格である。

注2：過去最高価格については、コメはタイ国家貿易取引委員会の公表する価格の最高価格、コメ以外はシカゴ商品取引所の全ての取引日における期近終値の最高価格。

資料2 穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移

- 世界の穀物消費量は、途上国の人口増、所得水準の向上等に伴い増加傾向で推移。2022/23年度は、2000/01年度に比べ1.5倍の水準に増加。一方、生産量は、主に単収の伸びにより消費量の増加に対応している。
- 2022/23年度の期末在庫率は、生産量が消費量を下回り、前年度より低下し、27.5%。直近の価格高騰年の2012/13年度(21.1%)を上回る見込み。

□ 穀物(コメ、とうもろこし、小麦、大麦等)の需給の推移

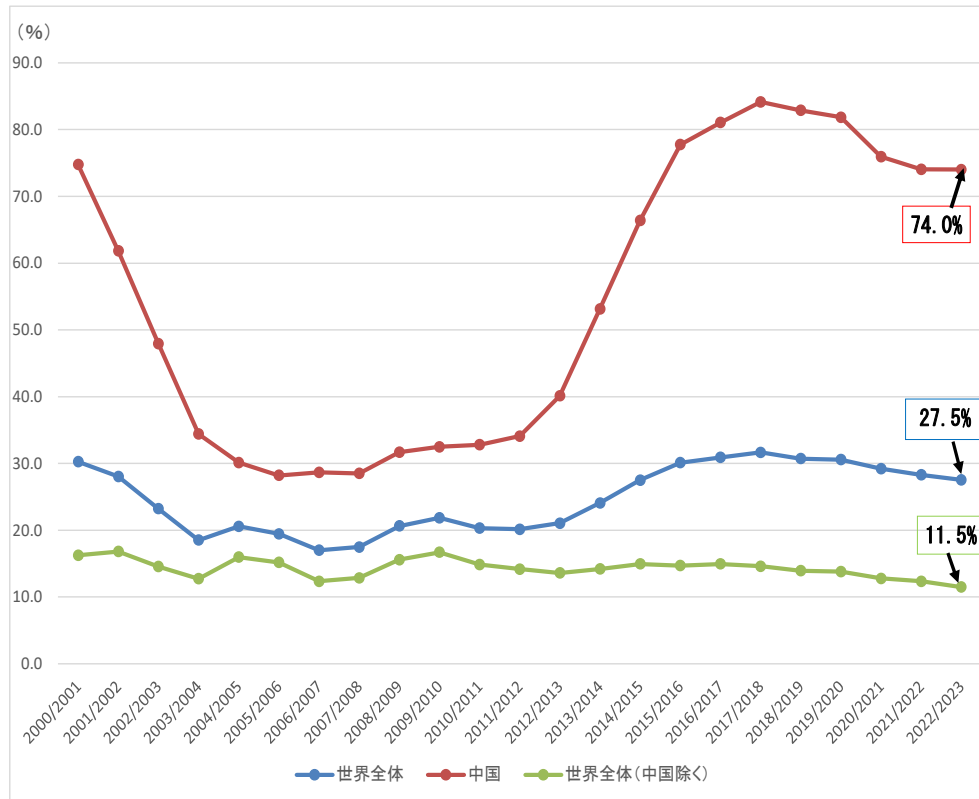


資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」 (January 2023)、「PS&D」

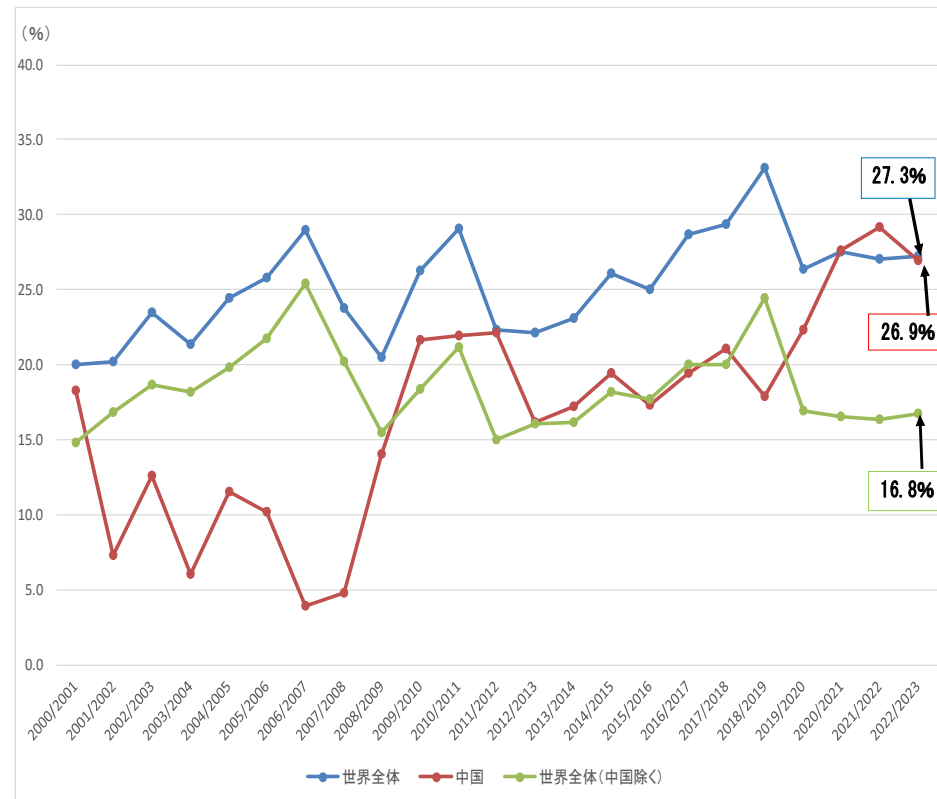
(注) なお、「PS&D」については、最新の公表データを使用している。

資料 3-1 穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、大豆）

○ 穀物全体の期末在庫率の推移



○ 大豆の期末在庫率の推移



資料：米国農務省「PS&D」(January 12, 2023)

注：1)穀物はとうもろこし、小麦、コメ等(大豆除く)。

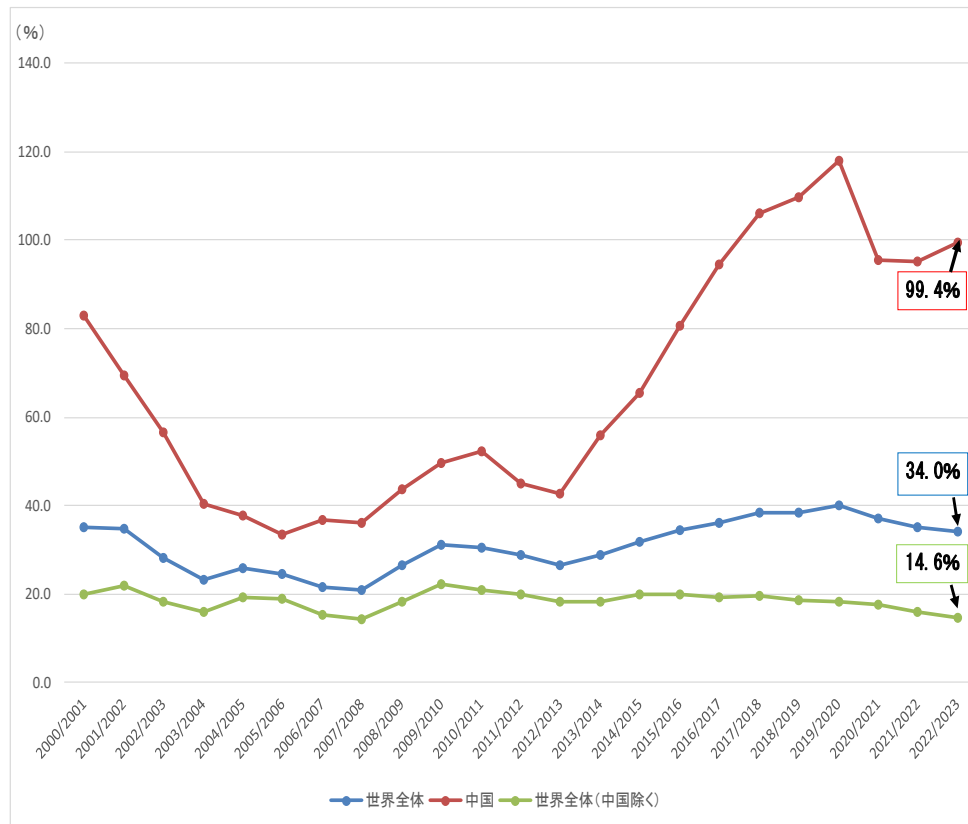
2)世界の期末在庫率(%)＝期末在庫量／(消費量＋輸出量－輸入量)×100 ※ただし大豆については、世界の期末在庫率(%)＝期末在庫量／消費量×100

3)中国の期末在庫率(%)＝中国の期末在庫量／(中国の消費量＋中国の輸出量)×100

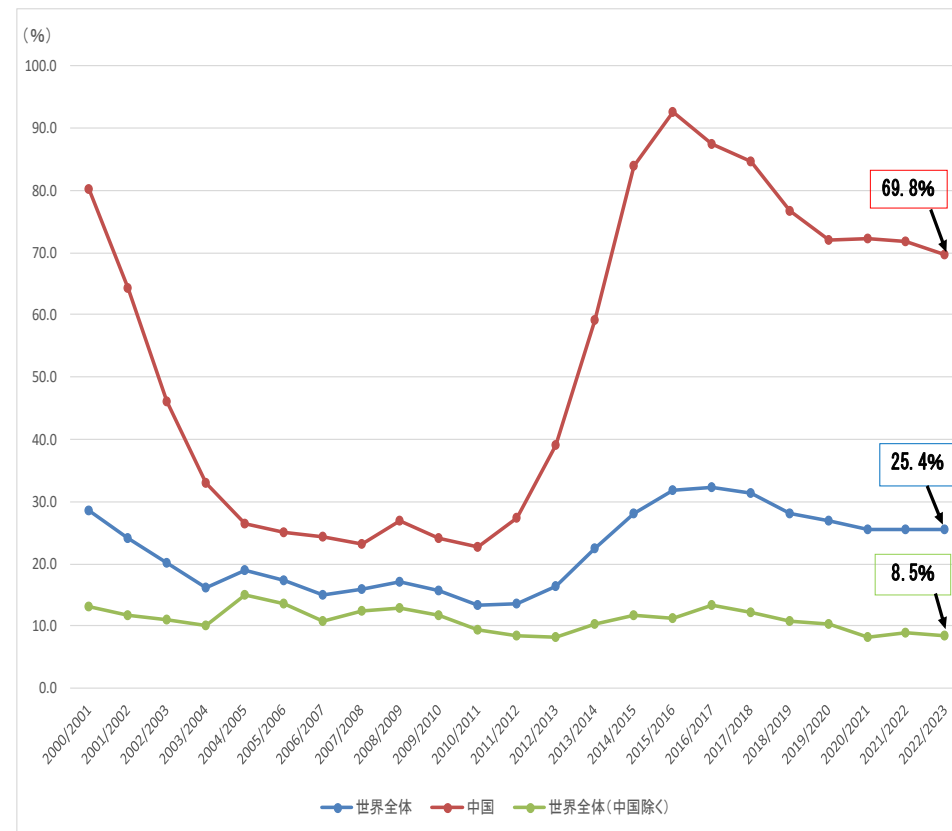
4)中国除く期末在庫率(%)＝中国除く期末在庫量／(中国除く消費量＋中国除く輸出量)×100

資料 3-2 穀物等の期末在庫率の推移（小麦、とうもろこし）

○ 小麦の期末在庫率の推移



○ とうもろこしの期末在庫率の推移



資料: 米国農務省「PS&D」(January 12, 2023)

注: 1)小麦は、小麦及び小麦粉(小麦換算)の計。

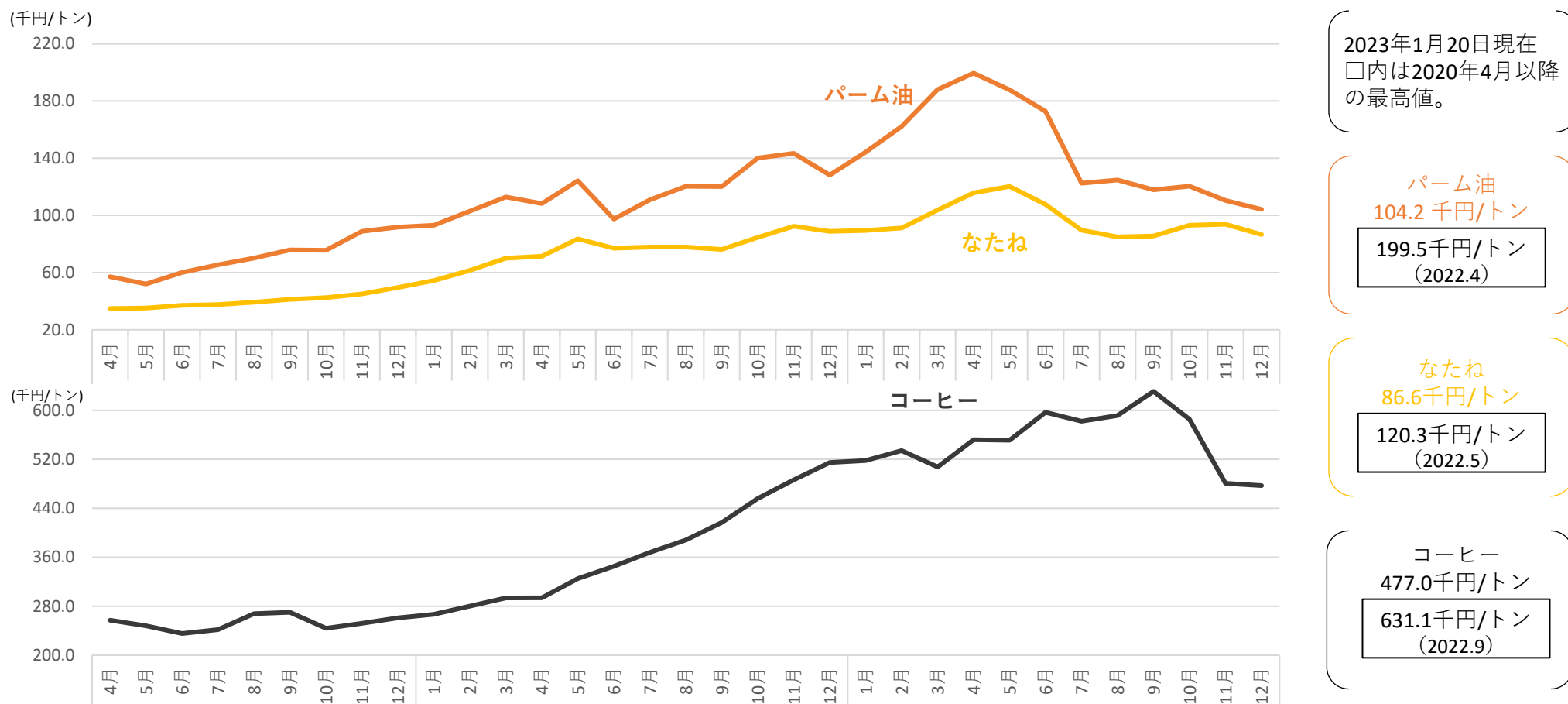
2)世界の期末在庫率(%)=期末在庫量/(消費量+輸出量-輸入量)×100

3)中国の期末在庫率(%)=中国の期末在庫量/(中国の消費量+中国の輸出量)×100

4)中国除く期末在庫率(%)=中国除く期末在庫量/(中国除く消費量+中国除く輸出量)×100

資料4-1 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の動向

- なたね、パーム油について、需要の面では世界的な人口増加や中国等における所得水準の向上による食用油需要の拡大、エネルギー向け需要の増加、ウクライナ情勢の影響などが価格に影響を及ぼしている。
- 供給面では、なたねについて、主産地であるカナダで減産があったものの、作付・生育状況が良好であり、平年並みの収量が見込まれている。パーム油については、インドネシアの輸出禁止措置の解除（2022年5月23日）やマレーシアの生産量の増加予測が価格に影響を及ぼしている。
- コーヒーについて、世界最大の生産国であるブラジルの天候不順や世界的な物流の混乱等供給不足への懸念が強まったこと、需要面ではワクチン接種による経済活動の回復からコーヒー消費量が増加したことが価格に影響を及ぼしている。

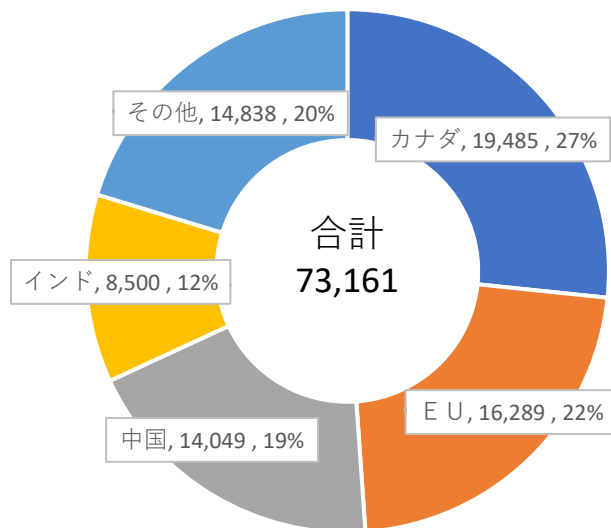


※ なたねの国際価格についてはカナダウィネベグ菜種市場の先物価格（期近物）を、パーム油の国際価格についてはマレーシアパーム油市場の先物価格（期近物）を、コーヒーの国際価格については国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均を用い、為替レートから円に換算して算出。

資料４－２ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の生産量及び輸入先

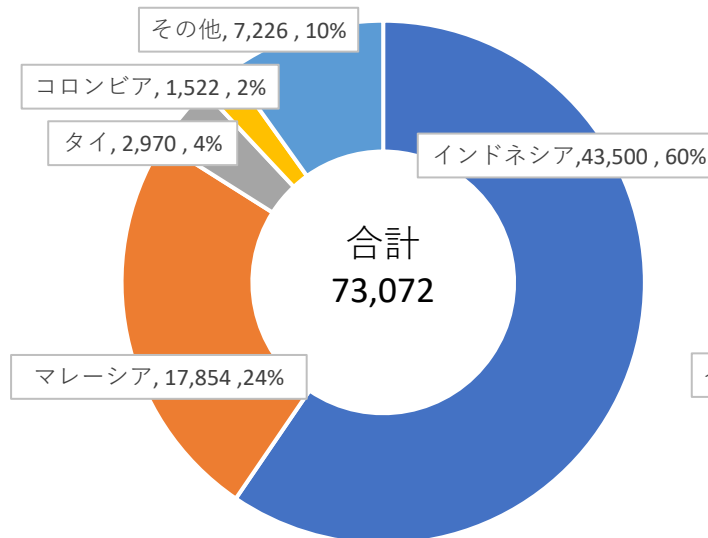
○主要生産国の生産状況

なたね生産量（2020/21）
（単位：千トン）



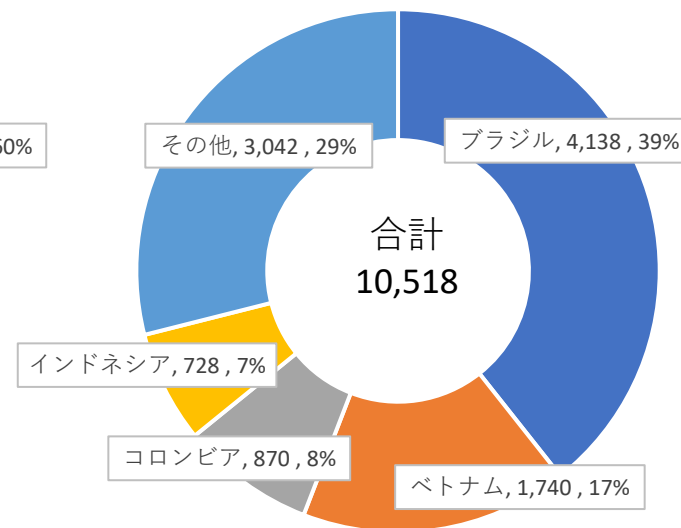
※米国農務省（Oilseeds: World Markets and Trade）

パーム油生産量（2020/21）
（単位：千トン）



※米国農務省（Oilseeds: World Markets and Trade）

コーヒー生産量（2020）
（単位：千トン）



※国際コーヒー機関（ICO）統計資料

○我が国の主な輸入先の状況（単位：千トン（2021年））

なたね	輸入量	割合
カナダ	2,124	90.7%
オーストラリア	218	9.3%
その他	0	0.0%
合計	2,342	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：1205）

パーム油	輸入量	割合
マレーシア	418	65.4%
インドネシア	220	34.5%
その他	0	0.0%
合計	638	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：1511）

コーヒー	輸入量	割合
ブラジル	146	36.4%
ベトナム	100	25.0%
コロンビア	48	11.9%
その他	108	26.7%
合計	402	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：0901.11～0901.12）

資料４－３ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移①

①なたね

単位（千円/トン）

	2020年									2021年												2022年											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
なたね	34.9	35.2	37.1	37.6	39.2	41.2	42.5	45.0	49.5	54.4	61.5	70.0	71.4	83.6	77.0	77.8	77.9	76.2	84.5	92.4	88.8	89.4	91.2	103.7	115.7	120.3	107.7	89.6	85.0	85.5	93.1	93.8	86.6
前月比	99.7	100.9	105.4	101.4	104.2	105.1	103.0	106.1	110.0	109.9	113.0	113.9	101.9	117.1	92.2	101.1	100.0	97.8	111.0	109.3	96.2	100.6	102.0	113.8	111.5	104.0	89.5	83.3	94.8	100.6	108.9	100.8	92.3
前年同月比	92.1	98.4	101.8	102.0	109.7	112.6	112.3	119.6	128.9	136.4	162.7	200.1	204.6	237.4	207.6	206.9	198.5	184.9	199.2	205.2	179.3	164.3	148.3	148.1	162.0	143.9	139.8	115.1	109.1	112.3	110.1	101.5	97.5

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 カナダウィニペグなたね定期相場の各月の月央値（期近物）から算出

②パーム油

単位（千円/トン）

	2020年									2021年												2022年											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
パーム油	57.1	52.1	60.0	65.4	70.1	75.8	75.5	88.8	91.8	93.1	102.9	112.9	108.2	124.2	97.4	110.8	120.3	120.1	140.1	143.4	128.2	144.2	162.2	188.0	199.5	187.8	172.8	122.4	124.7	117.9	120.4	110.4	104.2
前月比	102.1	91.1	115.3	109.0	107.2	108.1	99.6	117.6	103.4	101.4	110.6	109.7	95.9	114.8	78.4	113.8	108.5	99.9	116.6	102.3	89.4	112.5	112.4	115.9	106.1	94.1	92.0	70.9	101.9	94.5	102.1	91.7	94.4
前年同月比	100.0	98.9	115.0	129.8	129.3	131.9	135.9	134.6	121.7	117.0	143.8	201.8	189.4	238.6	162.3	169.4	171.5	158.4	185.5	161.5	139.7	155.0	157.5	166.6	184.4	151.2	177.3	110.5	103.7	98.1	85.9	77.0	81.3

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 マレーシアパーム油定期相場の各月の月央値（期近物）から算出

資料 4－4 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移②

③ コーヒー

単位（千円/トン）

	2020年									2021年												2022年											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
コー ヒー	257.1	247.9	235.5	241.8	267.7	270.0	244.0	251.9	260.9	266.8	280.2	293.5	293.7	325.2	345.1	367.9	388.1	416.7	455.9	486.3	514.7	517.9	534.1	507.5	552.1	551.2	596.8	582.3	591.6	631.1	585.4	480.6	477.0
前月比	99.5	96.4	95.0	102.7	110.7	100.9	90.4	103.3	103.6	102.3	105.0	104.7	100.1	110.7	106.1	106.6	105.5	107.4	109.4	106.7	105.8	100.6	103.1	95.0	108.8	99.8	108.3	97.6	101.6	106.7	92.8	82.1	99.2
前年同 月比	111.0	111.4	99.1	98.0	119.0	116.0	105.3	97.4	92.9	104.6	115.4	113.6	114.2	131.2	146.6	152.2	145.0	154.3	186.9	193.0	197.3	194.1	190.6	172.9	188.0	169.5	172.9	158.3	152.4	151.4	128.4	98.8	92.7

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均から算出

2 ICO複合指標価格は、米国、ドイツ、フランスの3大市場の現物の成約価格を収集しICOの定める方法で4品種ごとの加重平均値を算出したもの。

資料5 食品小売価格の動向

○ 令和4年12月の国内の加工食品の消費者物価指数は98.7～162.5（前年同月比で－1.2%～33.6%）の範囲内。

消費者物価指数（総務省） （令和4年7月～令和4年12月）

	H29	H30	H31 (R元)	R2	R3	R4	R4						
品目	平均	平均	平均	平均	平均	平均	7月	8月	9月	10月	11月	12月	上昇率 (前年 同月比)
食パン	99.6	100.2	101.1	100.0	99.2	110.3	111.9	114.4	113.8	113.7	114.2	114.1	14.1%
即席めん	95.7	95.3	98.5	100.0	100.1	107.6	113.7	114.9	112.4	112.3	114.2	111.6	13.3%
豆腐	98.6	98.8	99.1	100.0	101.3	105.3	104.9	105.1	106.7	108.3	109.1	109.9	7.2%
食用油 (キャノーラ油)	102.7	101.5	100.9	100.0	106.9	144.4	145.8	150.4	156.8	160.2	162.7	162.5	33.6%
みそ	96.9	97.4	99.1	100.0	99.3	101.3	99.9	100.1	103.4	103.6	104.9	104.4	7.0%
マヨネーズ	102.3	100.8	100.7	100.0	105.6	125.6	125.2	126.5	127.0	133.7	136.1	137.4	22.6%
チーズ	97.3	100.9	101.3	100.0	98.7	107.5	106.2	106.6	113.2	117.1	118.6	117.5	23.3%
バター	99.3	99.5	99.9	100.0	99.9	99.2	99.1	99.4	98.7	98.8	98.5	98.7	-1.2%
生鮮食品を 除く食料	97.0	97.9	99.0	100.0	100.2	104.1	103.8	104.2	105.0	106.7	107.9	108.3	7.4%

注1: 令和2年の平均値を100とした指数で表記。

【参考】

食品価格動向調査（農林水産省） （令和4年7月～令和5年1月）

	H30	H31 (R元)	R2	R3	R4	R4								
品目	平均	平均	平均	平均	平均	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	上昇率 (前月比)	上昇率 (前年 同月比)
食パン	97.9	101.3	100.0	98.6	107.8	109.8	111.1	110.7	110.9	111.3	112.2	111.5	0.8%	9.2%
即席めん	92.4	97.9	100.0	99.2	105.6	111.2	111.2	110.0	110.0	110.6	110.6	111.2	0.0%	13.0%
豆腐	100.1	100.9	100.0	100.6	103.7	103.3	103.7	104.2	107.2	107.2	107.6	108.5	0.4%	6.8%
食用油 (キャノーラ油)	97.9	103.5	100.0	104.1	140.7	139.1	148.3	156.8	160.6	161.2	161.2	162.2	0.0%	36.2%
みそ	96.6	100.4	100.0	99.2	100.1	99.8	100.4	101.7	102.5	102.7	102.7	102.3	0.0%	4.7%
マヨネーズ	97.9	103.1	100.0	102.2	117.7	117.2	118.3	116.9	126.2	128.9	128.3	129.6	-0.5%	22.4%
チーズ	98.6	100.9	100.0	98.1	105.7	105.0	104.5	108.0	114.4	115.4	110.9	116.9	-3.9%	18.6%
バター	99.0	99.5	100.0	99.8	99.1	99.0	99.3	98.6	98.6	98.6	98.6	98.6	0.0%	-1.1%

注1: 令和2年の平均値を100とした指数で表記。

注2: 調査は原則、各都道府県10店舗で実施。平成30年9月までは週1回、同年10月以降は月1回実施。

注3: 調査結果は調査期間中の平均値で算出。

注4: 令和2年4～5月、令和3年1～3月、同5～9月については、新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言の対象都道府県においては調査を中止。そのためそれぞれ前月の値とは接続しない。

資料 6-1 海外の畜産物の需給動向（ALIC提供）

- 独立行政法人農畜産業振興機構（ALIC）は毎月25日頃に海外の畜産物の需給動向を公表（月報 畜産の情報）
- 2022年2月号（1月25日に公表）の各品目の主な動きは以下の通り

『月報 畜産の情報』

◆牛肉

（米国）牛肉輸出量が拡大、10月としては過去最高を記録

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002571.html

（豪州）牛輸出量低迷も、今後は輸出増に向けた好機との見通し

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002572.html

（ブラジル）牛肉生産量は22、23年と2年連続で増加を予測

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002573.html

◆豚肉

（米国）22年10月の肥育豚価格、前年同月比で大幅に上昇

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002574.html

（メキシコ）23年の豚肉生産量は前年比4.6%増の見通し

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002575.html

（EU）豚肉生産量は減少、豚肉価格は低下の傾向

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002576.html

（中国）需要期を迎えるも、下落に転じる豚肉価格

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002577.html

資料 6-2 海外の畜産物の需給動向（ALIC提供）

◆鶏肉

(タイ) 鶏肉価格は高値持続も下落傾向

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002578.html

◆牛乳・乳製品

(EU) 生乳取引価格の記録的高騰は続くものの、伸び率鈍化

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002579.html

(豪州) 生乳生産量の前年割れ続く

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002580.html

(NZ) 生乳生産量は前年割れが続くも、乳製品輸出額は過去最高の見込み

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002581.html

◆飼料穀物

(世界) 世界の期末在庫が5カ月連続下方修正され、3億トンを下回る見込み

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002582.html

(世界) 生産量などは据え置かれ、世界期末在庫は引き続き1億トン台を維持

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002583.html

(米国) 米国輸出量が下方修正され、期末在庫率は8.9%まで上昇

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002584.html

(ブラジル) 22/23年度トウモロコシ、大豆生産量ともに過去最大の見込み

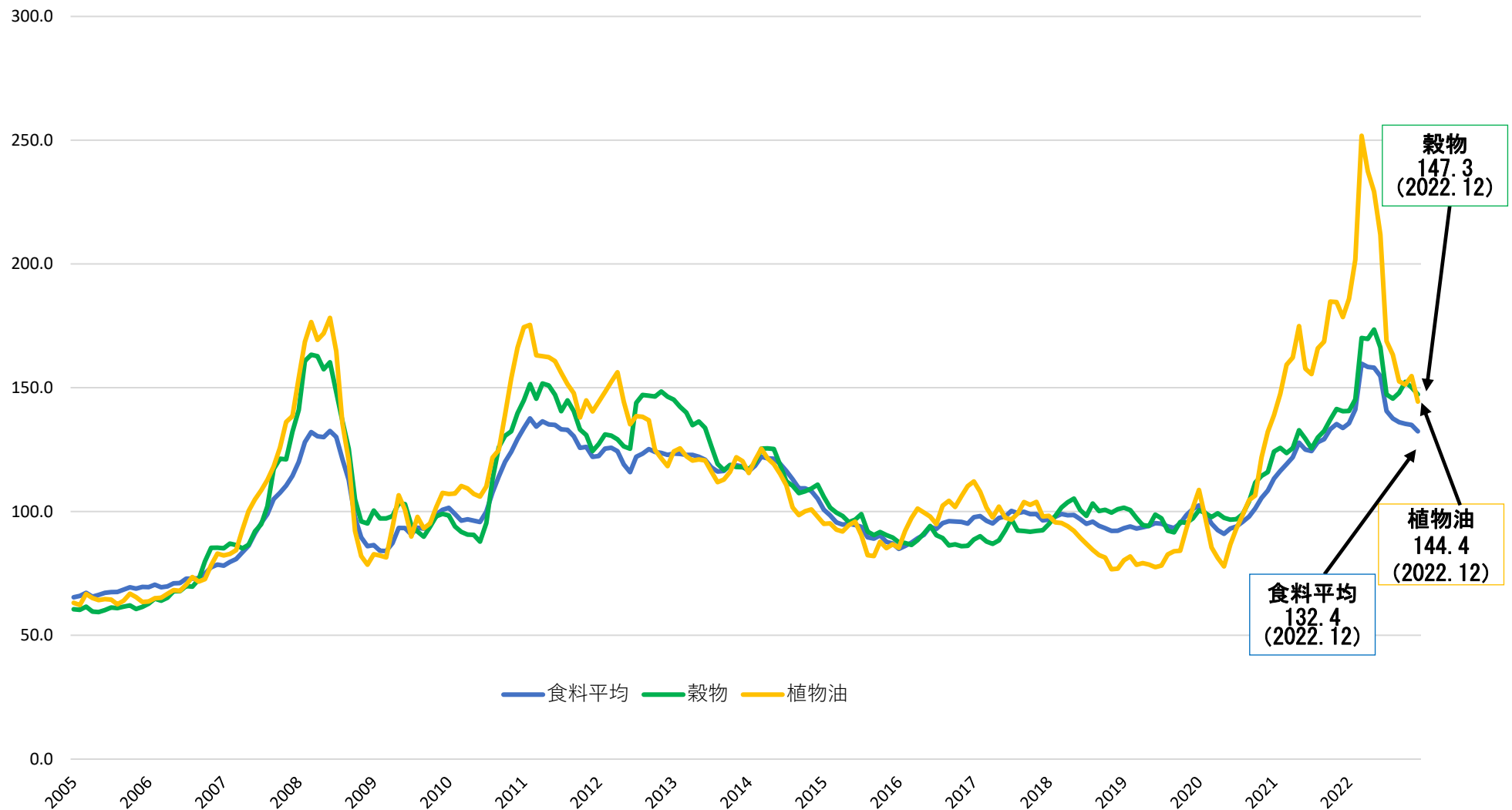
https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002585.html

(中国) トウモロコシおよび大豆の価格動向

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002586.html

資料 7 FAO食料価格指数

(2014-16平均=100)



資料: FAO「Food Price Index」(2023.1)より作成

注: 穀物はとうもろこし、小麦、コメ等、植物油は大豆油、菜種油、ひまわり油、パーム油等

(品目別需給編)

1 小麦

(1) 国際的な小麦需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し>

2022/23 年度

生産量 前年度比  前月比 

- ・中国で下方修正されたものの、ウクライナ、EU 等で上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

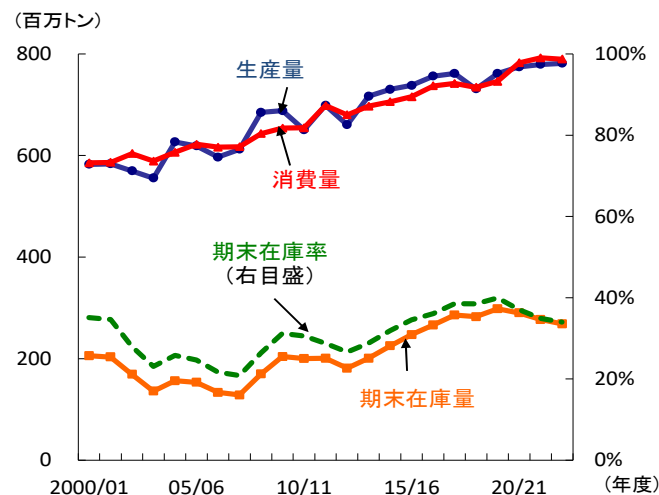
消費量 前年度比  前月比 

- ・ウクライナ等で下方修正されたものの、米国等で上方修正され、前月から上方修正された。

輸出量 前年度比  前月比 

- ・インドで下方修正されたものの、EU、ウクライナ等で上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

期末在庫量 前年度比  前月比 



資料:USDA「PS&D」(2023. 1. 12) をもとに農林水産省にて作成

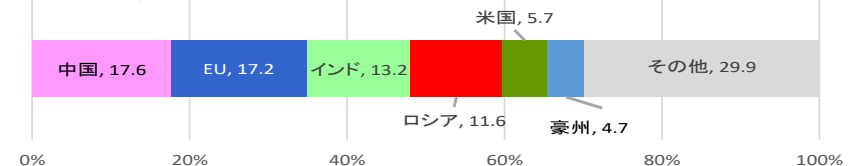
◎世界の小麦需給

(単位: 百万トン)

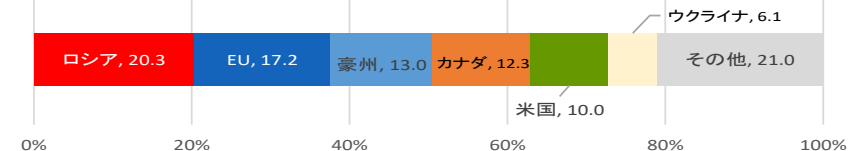
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	774.6	779.3	781.3	0.7	0.3
消 費 量	782.7	792.5	789.7	0.2	▲ 0.3
うち飼料用	157.9	160.2	155.3	0.4	▲ 3.0
輸 出 量	203.3	202.6	211.6	0.8	4.5
輸 入 量	194.7	198.5	205.1	0.8	3.3
期末在庫量	290.0	276.8	268.4	1.1	▲ 3.0
期末在庫率	37.1%	34.9%	34.0%	0.1	▲ 0.9

資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」 (12 January 2023)

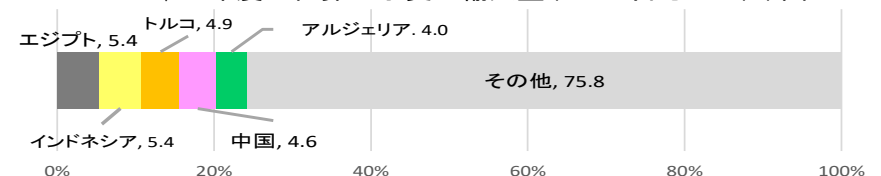
○ 2022/23年度の世界の小麦の生産量(781.3百万トン)(単位: %)



○ 2022/23年度の世界の小麦の輸出量(211.6百万トン)(単位: %)



○ 2022/23年度の世界の小麦の輸入量(205.1百万トン)(単位: %)



(2) 国別の小麦の需給動向

＜ 米国 ＞ 2023/24 年度の冬小麦の播種面積は 8 年間で最大

【生育・生産状況】USDA によれば、2022/23 年度の実産量は、前月予測からの変更はなく 44.9 百万トンと前年度に比べ 0.2%増加したものの、2003/04 年度以降では 2021/22 年度に次ぐ低水準。

同「Crop production 2022 Summary」(2023.1.12)によれば、冬小麦、春小麦、デュラム小麦の実産量は、それぞれ、30.0 百万トン(前年度比 13.6%減、5 年平均 33.9 百万トン)、13.1 百万トン(同 45.7%増、同 13.7 百万トン)、1.7 百万トン(同 69.9%増、同 1.6 百万トン)の見込み。冬小麦は、主要生産地の干ばつの影響で前年度に比べ生産量が減少した一方、春小麦、デュラム小麦は降雨過多による播種遅延もあったが、その後は天候に恵まれ、乾燥により減少した前年度から生産量は回復した。

また、同「Winter Wheat and Canola Seedings」(2023.1.12)等によれば、2023/24 年度の冬小麦の播種面積は 2015/16 年度以降最高の 14.95 百万ヘクタールであり、2022/23 年度(13.46 百万ヘクタール)に比べ 11%増、2021/22 年度に比べ 9.7%増となった。品種別にはハード・レッド・ウインター(HRW)が 10.24 百万ヘクタールと前年度に比べ 10%増加、ソフト・レッド・ウインター(SRW)は 3.20 百万ヘクタールで同 20%増加、ホワイト小麦(WW)は 1.51 百万ヘクタールと同 3 %増加した。小麦生産地の南部平原で播種期に歴史的な干ばつが継続したにもかかわらず、小麦相場の高さや作物保険保証価格の上昇等により作付面積が増加した。また、米国東部の SRW 産地では干ばつが概ね終息した。一方で大平原の HRW 産地(カンザス州、オクラホマ州など)では、干ばつ状況は改善したものの、1 月 10 日現在で約 59%を占めている。同「Wheat Outlook」(2023.1.17)によれば、1 月 1 日現在、HRW 生産地の作柄評価(やや良い～良)の割合は、コロラド州が 50%(前年 11 月 27 日時点 30%)、オクラホマ州が 38%(同 31%)と改善したものの、カンザス州が 19%(同 20%)、ネブラスカ州が 18%(同 20%)と悪化した。今後、3～4 月の天候が単収を決める重要な要因となる。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2022/23 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、21.1 百万トンと 1972/73 年度以降最低の見込み。米国産のブラジル向け輸出量は、アルゼンチンの減産による輸出減少から、前年度同時期に比べ 3 倍になるとみられる一方、豪州やロシアの豊作により米国産のフィリピンやナイジェリアへの輸出量は歴史的な低さとなっている。

なお、12 月の輸出先国は、メキシコ(28.7%)、日本(15.6%)、韓国(13.6%)の順。

小麦一米国(冬小麦が全体の 7 割、春小麦は 3 割)

(単位:百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年6月～23年5月)		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	49.8	44.8	44.9	-	0.2
消 費 量	30.4	29.6	30.7	0.9	3.5
うち飼料用	2.5	1.6	2.2	0.8	36.3
輸 出 量	27.1	21.8	21.1	-	▲ 3.2
輸 入 量	2.7	2.6	3.3	-	26.3
期末在庫量	23.0	19.0	15.4	▲ 0.1	▲ 18.8
期末在庫率	40.0%	37.0%	29.8%	▲ 0.7	▲ 7.2

(参考)

収穫面積(百万ha)	14.89	15.03	14.36	-	▲ 4.5
単収(t/ha)	3.34	2.98	3.13	-	5.0

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」
「World Agricultural Production」(12 January 2023)

図:米国産小麦の実産量、収穫面積、単収(21/22、22/23 年度)

(生産量) (百万トン)			
	2021/22年度	2022/23年度	増減率(%)
冬小麦	34.8	30.0	-13.8
春小麦	9.0	13.1	45.6
デュラム小麦	1.0	1.7	70
合計	44.8	44.9	0.2
(収穫面積) (百万ヘクタール)			
	2021/22年度	2022/23年度	増減率(%)
冬小麦	10.31	9.49	-8.0
春小麦	4.11	4.22	2.7
デュラム小麦	6.18	6.40	3.6
合計	15.03	14.36	-4.5
(単収) (t/ha)			
	2021/22年度	2022/23年度	増減率(%)
冬小麦	3.37	3.16	-6.2
春小麦	2.19	3.11	42.0
デュラム小麦	1.66	2.72	63.9
合計	2.98	3.13	5.0

資料:USDA「Crop Production 2022 Summary」(2023.1.12)

表:米国産小麦の輸出先国別輸出量

2022年 (2022年12月)			2022年 (2022年1月6日～2023年1月5日)			2021年 (2021年1月7日～2022年1月6日)		
国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア
メキシコ	30.1	28.7	メキシコ	376.3	19.0	メキシコ	378.0	16.5
日本	16.4	15.6	フィリピン	228.4	11.5	フィリピン	290.0	12.7
韓国	14.3	13.6	日本	212.2	10.7	日本	233.0	10.2
エチオピア	7.0	6.7	韓国	122.1	6.2	中国	227.4	9.9
イタリア	6.0	5.7	ナイジェリア	117.3	5.9	韓国	176.7	7.7
その他	31.2	29.7	その他	928.1	46.8	その他	984.6	43.0
計	105.0	100.0	計	1,984.4	100.0	計	2,289.7	100.0

資料:USDA「Federal Grain Inspection Services Yearly Export Grain Totals」(2023.1.13)

＜ カナダ ＞ 2023/24 年度の小麦全体の生産量は、34.3 百万トンと増加の見込み

【生育・生産状況】カナダ農務農産食品省(AAFC)「Outlook for Principal Field Crops」(2023.1.20)によれば、2022/23 年度の小麦全体の生産量は、前月予測からの変更はなく、33.8 百万トンの見込み。また、カナダ西部の干ばつにより生産量が減少した 2021/22 年度に比べると、収穫面積が増加し単収も上昇したことから、生産量は 51.7%増加(5 年平均比 10.4%増)する見込み。品種別には、普通小麦が 28.4 百万トン(前年度比 47.4%増)、デュラム小麦が 5.4 百万トン(79.2%増)となる見込み。

カナダ穀物委員会(Canadian Grain Commission)によれば、サンプル調査の結果(12 月 1 日時点)、普通小麦の品質は良好で、サンプルの 79%が 1 等、14%が 2 等(前年度同時期：90%が 1、2 等)に格付けされ、平均タンパク質含有率は 13.8%と前年度同時期(14.7%)を下回っている。また、デュラム小麦は、サンプルの 61%が 1 等、20%が 2 等(同：70%が 1、2 等)に格付けされ、平均タンパク質含有率は 14.5%と前年度同時期(15.7%)を下回っている。

また、2023/24 年度の小麦全体の生産量は、34.3 百万トン(2022/23 年度比 1.5 %増)、普通小麦が 28.9 百万トン(同 1.5%増)、デュラム小麦が 5.4 百万トン(同 0.1%増)の見込み。

【貿易情報・その他】AAFC によれば、2022/23 年度の小麦全体の輸出量は、前月予測から 0.2 百万トン上方修正され、前年度に比べ 58.0%増加の 23.9 百万トン。そのうち、普通小麦は、8 月から 11 月までの輸出量が前年度同期の 50 %増の 6.7 百万トンになるなど、輸出ペースが好調のため、前月予測から 0.2 百万トン上方修正され、前年度に比べ 53.9%増加の 19.1 百万トンとなる見込み。デュラム小麦は、減産となった欧州(イタリア、スペイン等)や北アフリカ(モロッコ、アルジェリア等)からの需要が強く、8 月から 11 月までの輸出量が前年度同期の 15%増の 1.5 百万トンとなったものの、前月予測からの変更はなく、前年度に比べ 76.7%増加の 4.8 百万トンとなる見込み。

カナダ穀物委員会(Canadian Grain Commission)によれば、11 月の輸出量は普通小麦が 184.3 万トン、デュラム小麦は 71.5 万トンの計 255.8 万トン。輸出先国は、普通小麦が中国(16.9%)、インドネシア(15.6%)、コロンビア(9.9%)、デュラム小麦は、イタリア(32.7%)、アルジェリア(19.9%)、米国(14.1%)の順。

また、2023/24 年度の輸出量は、普通小麦が 2022/23 年度に比べ 2.6%増加の 19.6 百万トン、デュラム小麦は、欧州の生産量回復による輸入需要の減少により、同 8.3%減少の 4.4 百万トンの見込み。

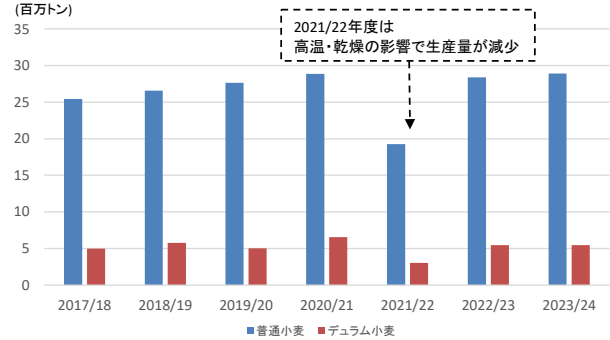
小麦－カナダ（春小麦を主に栽培）

(単位：百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年8月～23年7月)			
			予測値、() はAAFC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	35.4	22.3	33.8 (33.8)	-	51.7	
消 費 量	9.1	10.0	8.6 (9.0)	-	▲ 14.4	
うち飼料用	4.2	5.0	3.5 (4.6)	-	▲ 29.9	
輸 出 量	26.4	15.1	26.0 (23.9)	-	71.8	
輸 入 量	0.6	0.6	0.6 (0.1)	-	9.1	
期末在庫量	6.0	3.7	3.6 (4.7)	-	▲ 3.3	
期末在庫率	16.7%	14.6%	10.3% (14.3%)	-	▲ 4.3	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	10.02	9.19	10.08 (10.08)	-	9.7	
単収(t/ha)	3.54	2.43	3.35 (3.35)	-	37.9	

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 January 2023)
AAFC 「Outlook For Principal Field Crops」(20 January 2022)

図 カナダ産普通小麦、デュラム小麦の生産量の推移



資料:AAFC「Outlook For Principal Field Crops」(2023.1.20)をもとに農林水産省で作成

表 カナダ産普通小麦、デュラム小麦の輸出先国別輸出量
＜普通小麦＞ ＜デュラム小麦＞

2022年11月			2022年11月		
国名	輸出量 (万トン)	輸出量シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	輸出量シェア (%)
中国	31.2	16.9	イタリア	23.4	32.7
インドネシア	28.7	15.6	アルジェリア	14.2	19.9
コロンビア	18.3	9.9	チュニジア	10.1	14.1
バングラデシュ	13.8	7.5	米国	6.0	8.4
日本	13.0	7.1	スペイン	5.1	7.1
その他	79.3	43.0	その他	12.7	17.8
計	184.3	100.0	計	71.5	100.0

注1:Canadian Grain Commissionが認可したエレベーターから輸出された小麦(Licensed)のみのデータ。

注2:普通小麦の品種はNO.1-3Canada Western Red Spring No.1Canada Western Red Winter

No.2Canada Eastern Red Spring No.2Canada Eastern Oter,デュラムはCanadaWestern Amber Durum Others

資料:Canadian Grain Commission「Export of Canadian Grain and Wheat Flour」(2022.12.20)をもとに作成。

＜ 豪州 ＞ 収穫がほぼ終了、生産量は史上最高の 36.6 百万トン

【生育・生産状況】USDA によれば、2022/23 年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、36.6 百万トンと、これまでの史上最高である前年度の 36.4 百万トンを 0.7%上回る見込み。

収穫面積は 13.00 百万ヘクタールと前年度(13.04 百万ヘクタール)を下回るものの、生育初期に良好な生育条件に恵まれたほか、その後、成熟期の前年 10 月に降雨に恵まれ、単収が 2.82 トン/ヘクタール(前年度比 1.1%増)と過去最高になる見込み。

豪州農業資源経済科学局(ABARES)「Australian Crop Report」(2022.12 月)によれば、2022/23 年度の実産量は、天候に恵まれ、前年度に比べ、WA 州で 2%増の 13.0 百万トンの見込み。一方、ニューサウスウェールズ州(NSW 州)では、州南部の洪水等により前年度に比べ 28%減少の 9.1 百万トンの見込み。

GIWA(ウェスタンオーストラリア州穀物団体)(2023.1.16)によれば、WA 州の実産量は前月予測から 0.9 百万トン上方修正され、前年度に比べ 7.7%増加の 13.9 百万トンと史上最高の見込み。2022/23 年度は、生育条件が良好で、霜害や前年度の実産量に影響を与えた洪水もなく、実産量が増加した。

現地情報会社によれば、1 月 5 日時点での豪州全体の収穫進捗率は 80%となった。また、品質は当初予測より良好であるものの、タンパク質含有量は通常よりも低いとみられている。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2022/23 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、27.50 百万トンとなり、史上最高となった 2021/22 年度(27.53 百万トン)の水準を維持する見込み。

現地情報会社によれば、ロシア、ウクライナ等の黒海諸国からの穀物輸出が不安定なため、豪州産の中東及びアフリカ諸国向け輸出は堅調に推移する見込み。また、干ばつによる実産量の減少によりアルゼンチンの輸出量が減少(「USDA 見通し」2021/22 年度:16.0 百万トン、2022/23 年度:7.5 百万トン)すると見込まれるため、アルゼンチン産と競合していたアジア市場では豪州産が増加する見込み。

豪州統計局によれば、2022 年 11 月の輸出量は 176.5 万トンと、前月(204.3 万トン)に比べ 13.6%減少。輸出先国は、中国(21.0%)、インドネシア(19.1%)、フィリピン(15.0%)の順。また、2022 年 1 月から 11 月までの輸出量は前年同期(2,332.5 万トン)を 12.1 %上回る 2,611.0 万トン。輸出先国は、中国(20.4%)、インドネシア (15.0%)、フィリピン(11.5%)の順。2021 年計で 294.3 万トンであった中国向け輸出量は、2022 年 11 月までにすでに 533.9 万トンと大幅に増加した。

小麦－豪州		(冬小麦を主に栽培)				(単位：百万トン)	
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年10～23年9月)				
			予測値、() はIGC		前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	31.9	36.4	36.6	(38.1)	-	0.7	
消 費 量	8.0	8.5	8.6	(8.7)	-	0.2	
うち飼料用	4.5	5.0	5.0	(5.0)	-	-	
輸 出 量	23.8	27.5	27.5	(27.2)	-	▲ 0.1	
輸 入 量	0.2	0.2	0.2	(0.3)	-	▲ 4.8	
期末在庫量	3.0	3.5	4.3	(4.5)	-	21.4	
期末在庫率	9.4%	9.7%	11.8%	(12.5%)	-	2.1	
(参考)							
収穫面積(百万ha)	12.64	13.04	13.00	(13.0)	-	▲ 0.3	
単収(t/ha)	2.52	2.79	2.82	(2.93)	-	1.1	
資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、 「World Agricultural Production」(12 January 2023) IGC 「Grain Market Report」(12 January 2023)							

写真：収穫が進む豪州産小麦(2022. 12. 22 WA 州)



表 豪州の小麦輸出量及び輸出先国 (輸出量:万トン、シェア:%)

2022年11月			2022年1月～11月		
国 名	輸出量	シェア	国 名	累積輸出量	シェア
中国	37.1	21.0	中国	533.9	20.4
インドネシア	33.7	19.1	インドネシア	392.6	15.0
フィリピン	26.5	15.0	フィリピン	299.7	11.5
ベトナム	19.3	10.9	ベトナム	272.3	10.4
日本	15.9	9.0	韓国	181.5	7.0
その他	44.0	24.9	その他	931.0	35.7
合計	176.5	100.0	合計	2,611.0	100.0

資料:豪州統計局の資料をもとに農林水産省で作成

< EU27+英国 > 増加した EU27 の輸入量の多くはウクライナ産

【生育・生産状況】欧州委員会(2022.12.22)によれば、EU27 の 2022/23 年度の生産量は、前月予測に比べ 0.5 百万トン下方修正され、前年度に比べ 2.5%減少の 134.7 百万トンの見込み。

そのうち、普通小麦の生産量は、ポルトガル等で上方修正されたものの、デンマーク等で下方修正されたことから、前月予測に比べ 0.5 百万トン下方修正され、127.5 百万トン。デュラム小麦は、ポルトガル等で上方修正されたものの、フランスで下方修正されたことから、前月予測からわずかに下方修正され、7.2 百万トンの見込み。また、USDA によれば、EU27 及び英国の生産量は、前月予測から EU27 が 0.4 百万トン、英国が 0.1 百万トン上方修正され、それぞれ 134.7 百万トン、15.5 百万トンの見込み。EU27 と英国の生産量の合計は 150.2 百万トン。

2023/24 年度の EU の冬小麦は越冬期を迎えていたが、2022 年 12 月の最終週から、欧州全土で季節外れの温暖な天候となり、各地で 1 週間の平均気温が例年に比べ 4～10 度高くなった。この影響で普通小麦の生育が早まり、このまま生育が早く進むと開花の段階で「寒の戻り」が発生し、小麦の成熟に影響を与える可能性がある。例えば、ポーランドでは主要な生産地で積雪(スノーカバー：積雪が低温から守る)がなくなり、冬期の気温の低下の影響が懸念されている。また、1 月に入り、欧州西部では降雨により一時的な水不足は解消された一方、地中海地域では乾燥状態が継続している。

【貿易情報・その他】USDA によれば、近年減少傾向であった EU27 の輸入量は、ウクライナからの輸入が増加したため、前月予測から 1.0 百万トン上方修正され、前年度に比べ 73.5%増加の 8.0 百万トンの見込み。2022 年 7 月から 12 月までの間、5.0 百万トン以上が輸入されたが、その半分以上はウクライナ産であった。輸入されたウクライナ産小麦はおおよそ飼料用グレードで、生産減となった EU 産とうもろこし飼料の代替として大麦とともに利用されたとみられる。また、イタリアがパスタ製品の原料としてデュラム小麦を追加輸入しているが、EU27 の小麦の輸入量の多くはデュラム小麦以外であり、前年度に比べデュラム小麦の輸入は減少している。また、EU27 の輸出量は、生産量の上方修正や好調な輸出ペースから、前月予測から 0.5 百万トン上方修正され 36.5 百万トンの見込み。

欧州委員会によれば、2022/23 年度(2022 年 7 月から 2023 年 6 月)のうち、2022 年 7 月から 10 月の輸出量は、普通小麦が 1,291.0 万トン(前年度同月 1,147.3 万トン、5 年平均 837.1 万トン)、デュラム小麦が 26.9 万トン(同 20.8 万トン、同 23.6 万トン)。

小麦－EU27+英国 (冬小麦を主に栽培)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23(22年7月～23年6月)			
			予測値、() はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	136.3	152.2	150.2 (149.3)	0.5	▲ 1.3	
消 費 量	118.2	123.7	124.1 (123.6)	-	0.3	
うち飼料用	48.5	52.4	52.3 (51.2)	-	▲ 0.2	
輸 出 量	30.2	32.8	37.8 (35.6)	0.5	15.4	
輸 入 量	8.6	7.2	9.8 (8.3)	1.0	35.4	
期末在庫量	12.1	15.2	13.3 (15.7)	1.0	▲ 12.2	
期末在庫率	8.2%	9.7%	8.2% (9.9%)	▲ 0.1	▲ 1.5	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	22.97	24.26	24.25 (26.00)	▲ 1.80	▲ 0.0	
単収(t/ha)	5.94	6.27	6.19 (5.74)	-	▲ 1.3	

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 January 2023)、
IGC 「Grain Market Report」(12 January 2023)

表内及び () 内のデータはEU27ヶ国+英国のデータ

表 EU27 の普通及びデュラム小麦の輸出先国別輸出品

2022年 (2022年10月)			2022年 (2022年7月～2022年10月)			2021年 (2021年7月～2021年10月)		
国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア
エジプト	60.1	21.0	アルジェリア	185.1	14.3	アルジェリア	205.4	17.9
モロッコ	43.7	15.3	モロッコ	166.4	12.9	エジプト	126.3	11.0
アルジェリア	43.5	15.2	エジプト	143.9	11.1	韓国	85.7	7.5
サウジアラビア	26.0	9.1	ナイジェリア	91.9	7.1	ナイジェリア	76.7	6.7
ナイジェリア	18.1	6.3	サウジアラビア	69.1	5.4	中国	51.7	4.5
その他	95.1	33.2	その他	634.6	49.2	その他	601.5	52.4
計	286.5	100.0	計	1,291.0	100.0	計	1,147.3	100.0

2022年 (2022年10月)			2022年 (2022年7月～2022年10月)			2021年 (2021年7月～2021年10月)		
国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア
タンザニア	4.9	42.2	タンザニア	4.9	18.2	トルコ	6.5	31.3
カメルーン	2.2	19.0	チュニジア	4.4	16.4	コートジボワール	3.4	16.3
ギニア	1.1	9.5	アルジェリア	3.1	11.5	サウジアラビア	1.3	6.3
サウジアラビア	0.7	6.0	カメルーン	2.5	9.3	スイス	1.2	5.8
モーリタニア	0.6	5.2	リビア	2.2	8.2	チュニジア	1.2	5.8
その他	2.1	18.1	その他	9.8	36.4	その他	7.2	34.6
計	11.6	100.0	計	26.9	100.0	計	20.8	100.0

資料：EU 委員会 Cereals export and imports(2022.12.22)をもとに農林水産省で作成

＜ 中国 ＞ カナダ産小麦の輸入が増加

【生育・生産状況】中国糧油情報センター「食用穀物市場需給状況月報」(2023.1.5)によれば、2022/23年度の生産量は、前月予測から0.7百万トン下方修正され、前年度に比べ0.6%増加の137.7百万トン(史上最高)の見込み。作期別の生産量は、冬小麦が132.7百万トン(前年度比0.8%増)、春小麦が5.0百万トン(同4.2%減)の見込み。2022年12月12日に公表された中国国家统计局「2022年糧食生産量データ」をもとに生産量等が更新された。省別の生産量は、河南省38.1百万トン(生産量シェア28.7%)、山東省26.4百万トン(同19.9%)、安徽省17.2百万トン(同12.9%)である。

同情報センターによれば、2023/24年度の冬小麦の生育状況は、北部で気温は平年並みからやや低かったものの、ほとんどの生産地で土壌水分が適量であり、日照も十分であった。南部では、ほぼ降水はなかったものの、日照と気温に恵まれた。

中央气象台によると、1月5日現在、北部の河北省、河南省、山東省では越冬期、南部の安徽省、江蘇省では分げつ期に入っている。

【貿易情報・その他】中国糧油情報センターによれば、輸入量は前月から1.8百万トン上方修正され、前年度(9.56百万トン)並みの9.60百万トンの見込み。世界的に小麦の供給状況は改善し、国際小麦相場が徐々に低下した一方で、中国国内卸売価格が依然として高水準なことから、中国国内価格と国際価格差が拡大したため、小麦の輸入量が上方修正された。

中国海関統計によれば、輸入量は、10月に123.7万トンと9月(36.4万トン)に比べ大幅に増加した後、2022年11月には100.2万トン(前年同月73.9万トン)に減少した(2022年の月平均輸入量80.0万トン)。輸入先国はカナダ、米国、豪州の順で、この3か国で輸入量の94.2%を占める。このうち、豪州産の輸入シェアは、9月に85.3%、10月に36.8%、11月に19.7%と減少傾向にある一方で、カナダ産のシェアは、9月に13.6%、10月に29.8%、11月に47.3%と増加傾向にある。中国は、カナダ、米国からは高たんぱく質小麦、豪州からは低たんぱく質小麦を輸入しているとみられる。

農業農村部「農産品供需形勢分析月報 2022年11月号」によれば、11月は、国内各地での新型コロナウイルス感染者の急増により、消費者の小麦粉備蓄意識が高まり、加工業者の稼働率も回復した。一方で、感染者拡大の影響で、市場で小麦供給の一時的な不足状況が発生し、国内小麦価格は上昇した。今後、国内小麦価格は短期的に高水準で上下するとみられる。

小麦－中国（冬小麦を主に栽培）

(単位：百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23(22年7月～23年6月)		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	134.3	137.0	137.7 (137.7)	▲ 0.3	0.6
消費量	150.0	148.0	144.0 (139.6)	-	▲ 2.7
うち飼料用	40.0	35.0	30.0 (25.0)	-	▲ 14.3
輸 出 量	0.8	0.9	0.9 (1.1)	-	2.3
輸 入 量	10.6	9.6	9.5 (8.2)	-	▲ 0.7
期末在庫量	144.1	141.8	144.1 (138.2)	▲ 0.3	1.6
期末在庫率	95.6%	95.2%	99.4% (98.3%)	▲ 0.2	4.2
(参考)					
収穫面積(百万ha)	23.38	23.57	23.52 (23.6)	▲ 0.08	▲ 0.2
単収(t/ha)	5.74	5.81	5.86 (5.83)	0.01	0.9

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 January 2023)
IGC 「Grain Market Report」(12 January 2023)

写真：冬小麦の越冬状況(2023年1月11日 山東省)



当該圃場では、前年12月上旬から越冬期に入り、生長は停止した。
気温は-3℃で、前年同期比2～3℃低く、また、12月は降水がなく、比較的乾燥した。

表：中国の小麦輸入量と輸入先

(輸出入量：万トン、シェア%)

2022年11月			2022年1月～2022年11月			2021年1月～2021年11月		
国名	輸入量	シェア	国名	輸入量	シェア	国名	輸入量	シェア
カナダ	47.4	47.3	豪州	516.8	58.7	米国	272.0	31.0
米国	27.3	27.2	フランス	157.1	17.8	カナダ	253.6	28.9
豪州	19.7	19.7	カナダ	142.5	16.2	豪州	219.8	25.0
フランス	5.0	5.0	米国	61.4	7.0	フランス	103.4	11.8
カザフスタン	7.0	7.0	カザフスタン	2.4	0.3	カザフスタン	18.3	2.1
ロシア	1.2	1.2	ロシア	0.3	0.0	トリアニア	6.8	0.8
-	-	-	-	-	-	ロシア	4.7	0.5
計	100.2	100.0	計	880.5	100.0	計	878.6	100.0

資料：中国海関統計(2022.12.20)をもとに農林水産省で作成資料

＜ ロシア ＞ 2023 年 2 月 15 日から同年 6 月 30 日まで穀物輸出枠 2,550 万トン

【生育・生産状況】USDA によれば、2022/23 年度の生産量(クリミア地域分を含まず)は、前月予測からの変更はなく 91.0 百万トンと、前年度に比べ 21.1%増加し、史上最高となる見込み。作期別生産量は、冬小麦が 68.0 百万トン(前年度比 30.3%増)、春小麦が 23.0 百万トン(同 0.2%増)の見込み。

ロシア連邦統計庁の速報値によれば、1 月 13 日時点の重量調整前の収穫量は 104.4 百万トン(前年度同時期 37.3%増、過去 5 年平均 32.4%増)となった。作期別の生産量は、冬小麦 74.0 百万トン(同 39.5%増、同 30.0%増)、春小麦 30.4 百万トン(同 32.3%増、同 38.4%増)。

現地情報会社によれば、2022/23 年度の品質は、非常に高かった前年度より低く中程度であるが、タンパク質含有量が低くとも食用、飼料用途があり、国内向け、輸出向けとも販売は止まっていない。

また、2023/24 年度の冬小麦の播種済み面積は、1 月 15 日時点で、前年度に比べ 1.4%減少の 29.05 百万ヘクタール。生育状況は、冬小麦はロシア・ヨーロッパ部で越冬期に入っている。12 月は気温が大きく変化したが、越冬期の気象条件としては並みであった。なお、暖冬でスノーカバーが溶けた中央連邦管区では、1 月に入り強い寒波に見舞われたため、作物に被害が生じる可能性がある。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2022/23 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、前年度に比べ 30.3%増加の 43.0 百万トン。現地情報会社によれば、2022 年 12 月の輸出量は 11 月に比べ 7.1%減少したが、ロシア産は価格競争力があることから、前年同月に比べ 32.4%増加している。

2022/23 年度のうち 2022 年 7 月から同年 12 月の輸出先国は、トルコ(16.9%)、エジプト(16.5%)、イラン(6.6%)の順。前年度同時期と比べると、伝統的な輸出先国のうちイラン(56.8%減)、トルコ(11%減)向けが減少する一方で、新規輸出国として、アルジェリア(270.6%増)、サウジアラビア(82.2%増)向けが増加している。USDA によれば、サウジアラビアは EU からの小麦輸入が減少する中、価格競争力が高く、輸出余力の高いロシア産の輸入を拡大した。検疫条件の合意も後押ししたとみられる。

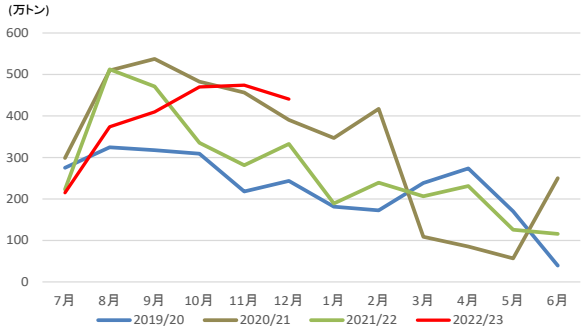
ロシア農業省は、2022 年 12 月 30 日に、2023 年 2 月 15 日から同年 6 月 30 日を実施期間とする穀物輸出枠(小麦、ライ麦、大麦、とうもろこしの合計:2,550 万トン)を設定すると公表。また、輸出需要の状況により増枠の可能性もある。前年においても同様の期間で輸出枠(小麦は 800 万トン、ライ麦、大麦、とうもろこし計で 300 万トン)が設定されたが、2022 年以降の対ロ制裁に伴う輸出の減速により、一部の業者は輸出枠を消化できなかった。

小麦一口シア(主産地の欧州部で冬小麦、シベリアで春小麦を栽培)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23(22年7月～23年6月)			
			予測値、() は IGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	85.4	75.2	91.0 (95.4)	-	21.1	
消 費 量	42.5	42.8	45.0 (45.8)	-	5.3	
うち飼料用	19.0	19.5	21.0 (20.5)	-	7.7	
輸 出 量	39.1	33.0	43.0 (42.1)	-	30.3	
輸 入 量	0.4	0.3	0.3 (0.2)	-	-	
期末在庫量	11.4	11.1	14.4 (19.0)	-	29.8	
期末在庫率	13.9%	14.6%	16.4% (21.6%)	-	1.7	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	28.68	27.63	28.70 (28.7)	-	3.9	
単収(t/ha)	2.98	2.72	3.17 (3.32)	-	16.5	

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 January 2023)
IGC 「Grain Market Report」(12 January 2023)

図：ロシア産小麦の月別輸出量の推移



資料：現地情報会社のデータをもとに農林水産省で作成

表：ロシア産小麦の輸出量と輸出先国

2022/23年度 (2022年12月)			2022/23年度 (2022年7月～2022年12月)			2021/22年度 (2021年7月～2021年12月)		
国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア
エジプト	71.2	16.2	トルコ	402.6	16.9	トルコ	452.4	21.0
トルコ	61.4	14.0	エジプト	392.8	16.5	イラン	364.1	16.9
パキスタン	39.5	9.0	イラン	157.2	6.6	エジプト	333.1	15.4
アルジェリア	35.6	8.1	カザフスタン	151.2	6.3	カザフスタン	134.7	6.2
ケニア	24.6	5.6	サウジアラビア	143.9	6.0	アゼルバイジャン	95.9	4.4
スーダン	24.3	5.5	アルジェリア	123.4	5.2	サウジアラビア	79.0	3.7
カザフスタン	20.6	4.7	スーダン	84.1	3.5	ナイジェリア	70.3	3.3
その他	162.8	37.0	その他	927.4	38.9	その他	626.5	29.1
計	440.0	100.0	計	2,382.6	100.0	計	2,156.0	100.0

資料：現地情報会社のデータをもとに農林水産省で作成

＜ウクライナ＞ 生産量は前月予測から上方修正も、前年度比 36.4%減少の 21.0 百万トン

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23年度の生産量(クリミア地域分を含む)は、前月予測から0.5 百万トン上方修正され、21.0百万トンの見込み。前月に比べ、収穫面積と単収が上方修正されたものの、ロシアの侵攻により、前年度に比べ収穫面積が27.8%、単収が11.7%減少した。このため、生産量は史上最高だった前年度(33.0百万トン)から36.4%減少、過去 5 年平均(27.9百万トン)に比べ 24.8%減少する見込み。前年度の小麦の大部分はロシアによる軍事侵攻前に播種されたが、侵攻後に農作業の大半と収穫が行われたため、大幅に収穫面積が減少した。

ウクライナ農業政策食料省(2023.1.20)によれば、2022/23年度の収穫面積は4.98百万ヘクタール(前年度7.07百万ヘクタールに比べ29.6%減)、単収は4.05トン/ヘクタール(同4.59トン/ヘクタール、11.8%減)となり、収穫量は20.2百万トン(同32.4百万トン、37.8%減)。

また、同省によれば、2023/24年度の冬小麦の播種済面積は、11月28日時点で3.76百万ヘクタール。播種予定面積は前年度(6.68百万ヘクタール)を40.3%下回る3.99百万ヘクタールで、播種進捗率は95%。生産コスト増の一方で、小麦の生産者価格が低く、小麦播種意欲が低下しており、国内情勢の不安定さから、小麦から菜種、大豆、ひまわり等のより収益性の高い油糧作物栽培にシフトする農家が増加するとみられている。また、そば等の国内向け品目の播種面積が増加する可能性もある。

生育段階については、11月上旬には気温の低下とともに、生長が停止し越冬期に入ったが、12月下旬に気温が上昇し、一部では生長が再開した。一部地域では、この気温の上下により、スノーカバーが溶け地表に氷層が形成されたため、冬枯れが懸念されている。

【貿易状況・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸出量は、「黒海穀物イニシアチブ」と陸上輸送による輸出量の増加から、前月予測から0.5百万トン上方修正され、13.0百万トンと予測されるものの、前年度に比べ31.0%減少する見込み。

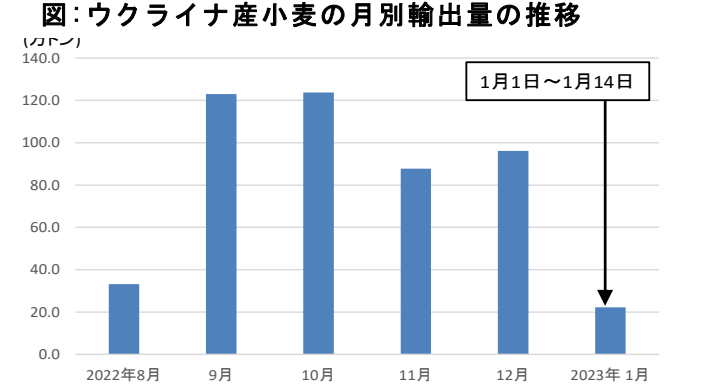
ウクライナ政府等によれば、2022/23年度の7月～12月のウクライナの小麦の輸出量は前年度比47.2%減の840.8万トン。輸出先国は、トルコ(20.3%)、ルーマニア(16.3%)、スペイン(13.7%)の順。

黒海穀物イニシアチブ「国連共同調整センター」によれば、12月31日現在、合意に基づく8月から12月までの黒海港湾からの小麦輸出量は463.7万トンで、輸出先国は、スペイン(23.8%)、トルコ(17.7%)、インドネシア(7.4%)の順。12月の小麦輸出量は、96.2万トンである。

小麦－ウクライナ (主に冬小麦を栽培)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23(22年7月～23年6月)		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	25.4	33.0	21.0 (25.2)	0.5	▲ 36.4
消 費 量	8.7	10.0	9.2 (12.7)	▲ 0.5	▲ 8.0
うち飼料用	2.6	4.0	4.0 (2.6)	▲ 0.5	-
輸 出 量	16.9	18.8	13.0 (14.0)	0.5	▲ 31.0
輸 入 量	0.1	0.1	0.1 (0.1)	-	▲ 28.6
期末在庫量	1.5	5.8	4.7 (4.5)	0.5	▲ 18.9
期末在庫率	5.9%	20.1%	21.2% (16.9%)	2.3	1.1
(参考)					
収穫面積(百万ha)	6.85	7.41	5.35 (6.6)	0.10	▲ 27.8
単収(t/ha)	3.71	4.45	3.93 (3.84)	0.03	▲ 11.7

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 January 2023)
IGC 「Grain Market Report」(12 January 2023)



資料:国連・黒海イニシアチブ共同調整センター(2023.1.16)

表：ウクライナ産小麦の輸出量と輸出先国

2022/23年度 (2022年12月)			2022/23年度 (2022年7月～2022年12月)		
国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア
スペイン	34.6	21.1	トルコ	170.7	20.3
トルコ	28.1	17.1	ルーマニア	137.4	16.3
ルーマニア	21.1	12.8	スペイン	115.4	13.7
インドネシア	18.4	11.2	ポーランド	5.7	0.7
ポーランド	12.8	7.8	イタリア	3.7	0.4
エジプト	9.4	5.7	インドネシア	3.5	0.4
ギリシャ	5.3	3.2	バングラデシュ	3.2	0.4
その他	34.6	21.1	その他	401.2	47.7
計	164.3	100.0	計	840.8	100.0

資料:現地情報会社のデータをもとに農林水産省で作成

2 とうもろこし

(1) 国際的なとうもろこし需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し> 2022/23 年度

生産量 前年度比 ↓ 前月比 ↓

・中国で上方修正も、米国、アルゼンチン、ブラジル等で下方修正され、前月から下方修正された。

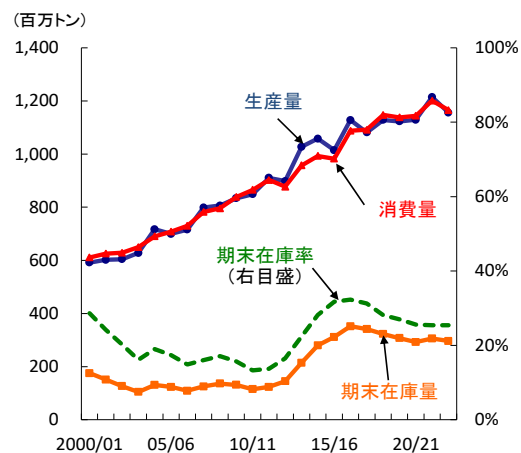
消費量 前年度比 ↓ 前月比 ↓

・中国等で上方修正も、ウクライナ、ブラジル、米国等で下方修正され、前月から下方修正された。

輸出量 前年度比 ↓ 前月比 ↓

・ウクライナ等で上方修正も、米国、アルゼンチン等で下方修正され、前月から下方修正された。

期末在庫量 前年度比 ↓ 前月比 ↓



資料：USDA「PS&D」（2023.1.12）をもとに農林水産省にて作成

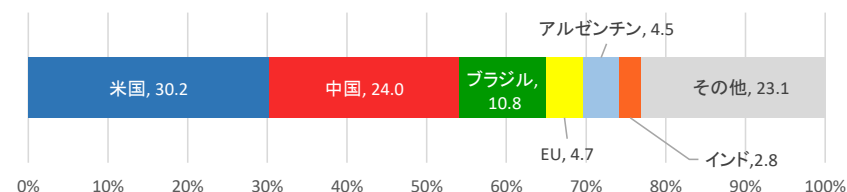
◎世界のとうもろこし需給

(単位：百万トン)

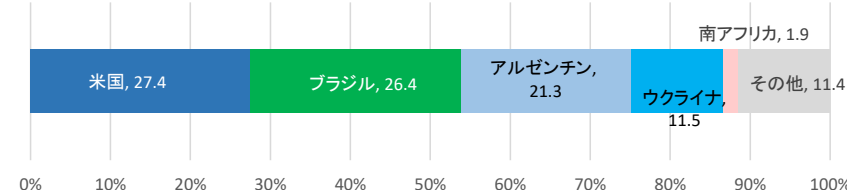
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23		
			予測値	前月予測からの 変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	1,129.2	1,214.9	1,155.9	▲ 5.9	▲ 4.9
消 費 量	1,144.1	1,201.5	1,165.5	▲ 5.1	▲ 3.0
うち飼料用	724.0	749.0	733.0	▲ 2.3	▲ 2.1
輸 出 量	182.7	204.0	178.2	▲ 3.5	▲ 12.7
輸 入 量	184.9	184.1	175.5	▲ 1.0	▲ 4.7
期末在庫量	292.5	306.0	296.4	▲ 2.0	▲ 3.1
期末在庫率	25.6%	25.5%	25.4%	▲ 0.1	▲ 0.0

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(12 January 2023)

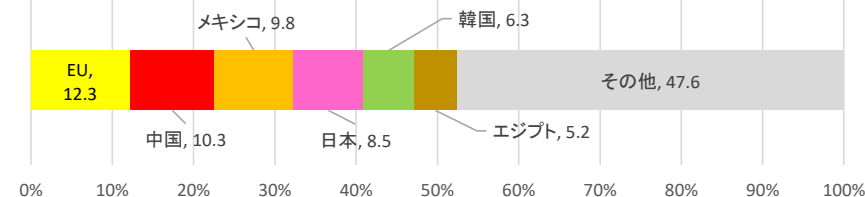
○ 2022/23 年度 世界のとうもろこしの生産量(1,155.9 百万トン) (単位：%)



○ 2022/23 年度 世界のとうもろこしの輸出量(178.2 百万トン) (単位：%)



○ 2022/23 年度 世界のとうもろこしの輸入量(175.5 百万トン) (単位：%)



（２）国別のとうもろこしの需給動向

＜ 米国 ＞ 生産量は収穫面積・単収減少により減産、輸出減の見通し

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、ネブラスカ州、カンザス州、ノースダコタ州等で下方修正されたことから前月予測から5.1百万トン下方修正され、夏季のコーンベルトの一部での高温・乾燥の影響から前年度より8.9%減の348.8百万トンの見込み。なお、収穫面積は、2008/09年度以来の低水準の見込み。

前年11月末時点で、収穫は例年より早いペースでほぼ終了した。

【需要状況】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、飼料用需要及びコーンスターチ等向け工業用需要の減退を受けて前月予測から0.9百万トン下方修正され、生産量の減少に伴い、前年度より4.0%減の304.6百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸出量は、生産量の下方修正や前年12月から1月上旬にかけての輸出が低調だったことにより前月予測から3.8百万トン下方修正され、前年度より22.1%減の48.9百万トンの見込み。これは、2019/20年度（45.2百万トン）以来の低水準である。

USDAによれば、2022年輸出検証高(2022年1月6日～2023年1月5日)は、51.5百万トンであり、内訳は中国（15.8百万トン）、メキシコ（14.2百万トン）、日本（9.0百万トン）、コロンビア（2.9百万トン）の順である。

USDAによれば、2022/23年度の期末在庫量は、生産量の下方修正が消費量及び輸出量の下方修正を上回ったことで、前月予測から0.4百万トン下方修正され、前年度より9.8%減の31.5百万トンの見込み。

期末在庫率は8.9%で、前年度より低下し、引き続き低水準の見込み。

とうもろこし－米国

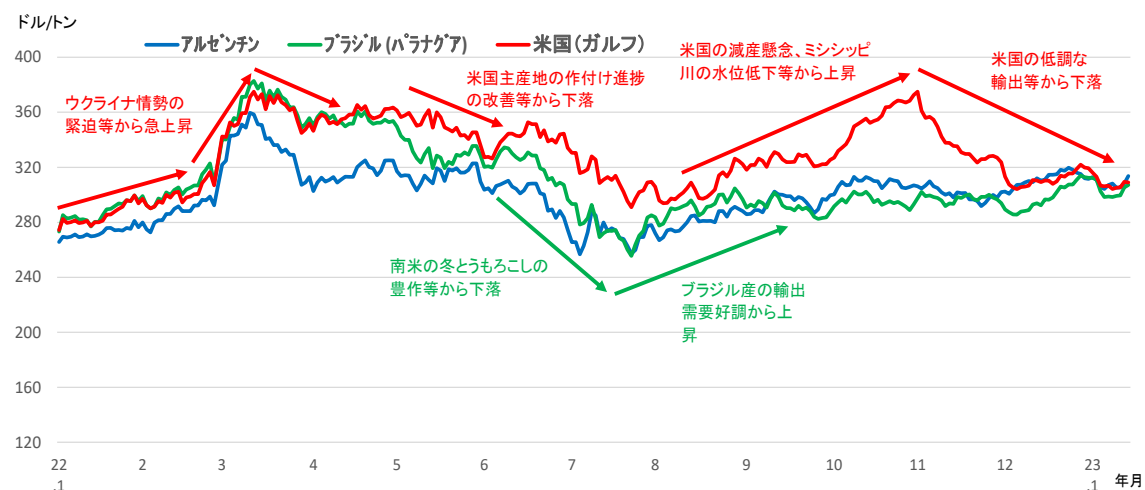
(単位：百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年9月～23年8月)		
			予測値	前月予測からの変更	対前年度増減率(%)
生 産 量	358.5	382.9	348.8	▲ 5.1	▲ 8.9
消 費 量	306.7	317.1	304.6	▲ 0.9	▲ 4.0
うち飼料用	142.4	145.3	134.0	▲ 0.6	▲ 7.8
エタノール用等	127.7	135.3	134.0	－	▲ 1.0
輸 出 量	69.8	62.8	48.9	▲ 3.8	▲ 22.1
輸 入 量	0.6	0.6	1.3	－	104.8
期末在庫量	31.4	35.0	31.5	▲ 0.4	▲ 9.8
期末在庫率	8.3%	9.2%	8.9%	0.0	▲ 0.3

(参考)					
収穫面積(百万ha)	33.31	34.53	32.05	▲ 0.67	▲ 7.2
単収(t/ha)	10.76	11.09	10.88	0.06	▲ 1.9

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 January 2023)

図：米国、ブラジル、アルゼンチンのとうもろこし輸出価格（FOB）の推移



資料：IGCのデータをもとに農林水産省にて作成

＜ ブラジル ＞ 生産量は史上最高、輸出増の見通し

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、前年12月の南部の乾燥がリオ・グランデ・ド・スール州等の夏とうもろこしの生育に影響し、前月予測から1.0百万トン下方修正されたものの、収穫面積及び単収の増加により、前年度より7.8%増の125.0百万トンで史上最高の見込み。1月上旬から中旬にかけて南部では高温・乾燥傾向が続いているものの、産地の大半で降雨に恵まれ、順調に生育している。

ブラジル食料供給公社（CONAB）月例報告（2023.1.12）によれば、生育期の2022/23年度の夏とうもろこしの生産量は、単収の増加により、前年度比5.7%増の26.5百万トンの見込み。一方、大豆収穫後に作付けされる冬とうもろこしの生産量は、前年度比11.9%増の98.6百万トンの見込み。夏作・冬作の合計では前年度比10.5%増の125.1百万トンで史上最高の見込み。（P.23 大豆－ブラジルのクロップカレンダー参照）。

南部のパラナ州で1月9日現在、夏とうもろこしの少なくとも85%が生殖生長期に入っている。南部のリオ・グランデ・ド・スール州で1月12日現在、夏とうもろこしの作付進捗率は93%。うち、79%が生殖生長期に入っている。

【需要状況】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、生産量の下方修正に伴い、前月予測から1.0百万トン下方修正されたものの、飼料用消費の増加に伴い、前年度より5.6%増の76.0百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、生産量の増加に伴い、前年度より1.1%増の47.0百万トンと史上最高の見込み。

ブラジル貿易統計によれば、2022年1～12月の輸出量は43.4百万トンで、前年同期（20.4百万トン）と比べ2.1倍となっている。内訳は、1位がイラン6.6百万トン、2位がスペイン4.9百万トン、3位が日本4.9百万トン。ロシアのウクライナ侵攻により、ウクライナ産の輸出が減少していることを受け、代替としてブラジル産の中東・EU向け輸出が大幅に増加した。なお、12月の輸出量は6.4百万トンで、前年同月（3.4百万トン）と比べ、1.9倍となっている。11月末以降、中国向け輸出が開始され、12月は第1位の1.1百万トン。今後、輸出が本格化するとみられる。

とうもろこし－ブラジル

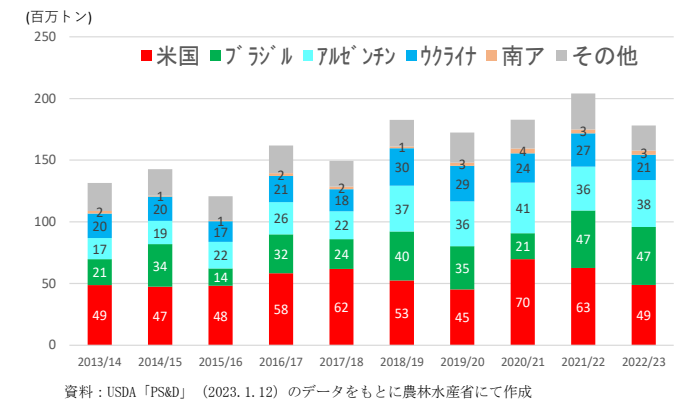
（大豆収穫後に栽培する冬とうもろこしが3/4を占め、夏とうもろこしは1/4）

（単位：百万トン）

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23（23年3月～24年2月）			
			予測値、() はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	87.0	116.0	125.0 (123.1)	▲ 1.0	7.8	
消 費 量	70.0	72.0	76.0 (77.6)	▲ 1.0	5.6	
うち飼料用	59.5	61.0	64.5 (55.5)	▲ 1.0	5.7	
輸 出 量	21.0	46.5	47.0 (44.6)	－	1.1	
輸 入 量	2.9	2.3	1.3 (0.5)	－	▲ 43.5	
期末在庫量	4.2	4.0	7.3 (6.1)	▲ 1.0	83.5	
期末在庫率	4.6%	3.3%	5.9% (5.0%)	▲ 0.8	2.6	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	19.90	21.80	22.70 (21.80)	－	4.1	
単収(t/ha)	4.37	5.32	5.51 (5.65)	▲ 0.04	3.6	

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 January 2023)
IGC「Grain Market Report」(12 January 2023)

図：世界のとうもろこし輸出国の輸出量の推



＜ アルゼンチン ＞ 干ばつが生産量に影響を与える懸念（輸出税継続）

【生育・生産状況】USDA によれば、2022/23 年度の実産量は、前年 10 月から 12 月にかけて高温・乾燥天候が続いた影響に加え、早植えとうもろこしから一般的に収量が劣るとされる遅植えとうもろこしに作付けが移行したことなどから、単収、収穫面積が下方修正されたことにより、前月予測から 3.0 百万トン下方修正された。しかし、単収の増加により、前年度より 5.1%増の 52.0 百万トンで 2020/21 年度に並ぶ史上最高の見込み。

ブエノスアイレス穀物取引所週報（2023.1.19）によれば、2022/23 年度の作付進捗率は 89%で、主産地での長引く高温・乾燥により過去 5 年平均（92%）より 3 ポイント遅れている。生産量は、44.5 百万トンと前年度（52.0 百万トン）から減少する見通し。過去 60 年間で最悪の干ばつともいわれており、ラニーニャ現象に伴う今後の乾燥天候の影響に注意が必要。

【需要状況】USDA によれば、2022/23 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、前年度より 2.2%増の 14.0 百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2022/23 年度の輸出量は、生産量の下方修正に伴い、前月予測から 3.0 百万トン下方修正されたものの、前年度より 7.0%増の 38.0 百万トンの見込み。

アルゼンチン国家統計局によれば、2022 年 1～11 月の輸出量は 34.1 百万トンで、前年同期（37.8 百万トン）より 9.7%減。内訳は、1 位がベトナム 5.0 百万トン、2 位が韓国 4.8 百万トン、3 位がペルー 3.0 百万トン。なお、11 月の輸出量は 1.7 百万トンで、ブラジルの冬とうもろこしの不作等により生産・輸出が好調だった前年同月（2.5 百万トン）と比べ、30.7%減。

アルゼンチン政府は、財政赤字の補填等のため、2019 年 12 月 14 日、輸出税を約 7%から 12%へ引き上げ、その後継続している。

2021 年 12 月 17 日、アルゼンチン農牧水産大臣は、とうもろこしと小麦の輸出に関し、国内向け穀物供給不足の回避と食料品価格の上昇を抑制するため、輸出上限数量を設定することを表明。1 月中旬現在、とうもろこしの輸出上限数量は 2021/22 年度 36 百万トン、2022/23 年度 20 百万トンに設定されている。

とうもろこしーアルゼンチン

（単位：百万トン）

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23（23年3月～24年2月）			
			予測値、() は IGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	52.0	49.5	52.0 (56.0)	▲ 3.0	5.1	
消 費 量	13.5	13.7	14.0 (20.4)	-	2.2	
うち飼料用	9.5	9.8	10.0 (15.5)	-	2.0	
輸 出 量	40.9	35.5	38.0 (37.3)	▲ 3.0	7.0	
輸 入 量	0.0	0.0	0.0 (0.4)	-	-	
期末在庫量	1.2	1.5	1.5 (2.2)	-	-	
期末在庫率	2.2%	3.0%	2.9% (3.9%)	0.2	▲ 0.2	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	6.55	7.10	6.90 (8.00)	▲ 0.10	▲ 2.8	
単収(t/ha)	7.94	6.97	7.54 (7.00)	▲ 0.32	8.2	

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 January 2023)
IGC 「Grain Market Report」(12 January 2023)

写真：北部サンタフェ州の遅植えとうもろこしの圃場風景
（1月4日撮影）

前年 12 月中旬に作付け。干ばつで、生育が不十分。
収穫は 7 月の予定。



< 中国 > 生産量、消費量ともに史上最高、輸入量減少の見通し

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、前年12月に中国国家統計局が発表したデータを反映し、前月予測から3.2百万トン上方修正され、主産地の黒竜江省等東北地区及び華北平原で生育期を通じて良好な天候に恵まれたことから、単収の増加により、前年度より1.7%増の277.2百万トンで史上最高の見込み。

前年11月上旬時点で、春とうもろこし、夏とうもろこしの収穫はすでに終了。

【需要状況】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、生産量の上方修正に伴い、前月予測から2.0百万トン上方修正され、旺盛な飼料用消費から前年度より2.1%増の297.0百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく、主要な輸入先であるウクライナの輸出減少に伴い、前年度より17.7%減の18.0百万トンの見込み。

中国の貿易統計によれば、2022年1～11月の輸入量は19.8百万トンで、前年同期比で26.9%減。内訳は、米国産14.4百万トン（73%）、ウクライナ産5.0百万トン（25%）。5月以降、前年同月に比べウクライナ産の輸入が大幅に減少している。（右図参照）

なお、前年11月末にCOFCO（中糧集団）が買い付けた6.8万トンのブラジル産とうもろこしを積んだばら積船が、1月上旬に広東省の港に到着した。今後、ブラジル産の輸入が本格化するとみられる。

農業農村部「農産品供需形勢分析月報 2022年11月号」によると、前年11月の国内流通価格は、2,980元/トンと前月（2,940元/トン）から上昇。主な要因は、とうもろこしの飼料用需要の増加、とうもろこし加工業者の稼働率回復及び農家の売り惜しみなどの影響である。一方、前年11月の輸入価格は、米国における順調な収穫や、原油、小麦等の商品価格の下落と相まって、3,220元/トンと前月（3,420元/トン）から下落。他の穀物も含めた今後の中国の輸入動向に注視が必要。

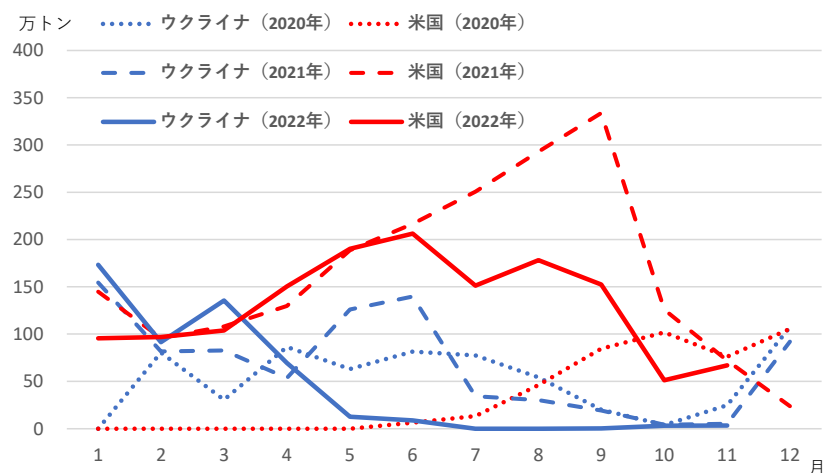
とうもろこしー中国

（単位：百万トン）

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年10月～23年9月)			
			予測値、() はIGC		前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	260.7	272.6	277.2	(277.2)	3.2	1.7
消 費 量	285.0	291.0	297.0	(309.4)	2.0	2.1
うち飼料用	203.0	209.0	216.0	(207.0)	2.0	3.3
輸 出 量	0.0	0.0	0.0	(0.1)	-	-
輸 入 量	29.5	21.9	18.0	(19.0)	-	▲ 17.7
期末在庫量	205.7	209.1	207.3	(175.0)	1.2	▲ 0.9
期末在庫率	72.2%	71.9%	69.8%	(56.5%)	▲ 0.1	▲ 2.1
(参考)						
収穫面積(百万ha)	41.26	43.32	43.07	(43.00)	0.07	▲ 0.6
単収(t/ha)	6.32	6.29	6.44	(6.45)	0.07	2.4

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 January 2023)
IGC「Grain Market Report」(12 January 2023)

図：中国におけるウクライナ、米国産とうもろこしの輸入状況



出典：中国海関統計

注：2020年1月分と2月分は合計で公表されたため、便宜上1/2で按分

< ウクライナ > ロシアによる侵攻により、輸出量は前年度より 24%減

【生育・生産状況】USDA によれば、2022/23 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、収穫期の前年 10 月～11 月の記録的な降雨に加え、労働力不足、燃料費の高騰、輸送や貯蔵の問題といったロシアの侵攻に起因する影響により、主産地の収穫が著しく遅れたこと、一部のとうもろこしが刈り残され、冬場の圃場に放置されていることなどから、収穫面積及び単収が減少したことで、史上最高の生産量となった前年度より 35.9%減の 27.0 百万トンの見込み。

ウクライナ農業政策食料省によれば、1 月 20 日時点で、収穫済面積は 3.7 百万ヘクタール、収穫量 24.4 百万トン、収穫進捗率は 87%となっている。

【需要状況】USDA によれば、2022/23 年度の消費量は、輸出量の上方修正に伴い、前月予測から 1.5 百万トン下方修正され、前年度より 43.1%減の 6.2 百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2022/23 年度の輸出量は、予想を上回る貿易実績を受けて前月予測から 3.0 百万トン上方修正されたものの、前年度より 24.0%減の 20.5 百万トンの見込み。

ウクライナ政府等によれば、2022/23 年度（2022 年 10 月～2023 年 9 月）のうち、2022 年 10 月～12 月の輸出量は、778 万トンで、前年度同期（959 万トン）に比べ 18.8%減。輸出先国は、中国、ルーマニア、スペイン、ハンガリー、イタリア等となっている。なお、この輸出量には、海上輸送に加え、陸路等の輸出も含まれる。

黒海穀物イニシアチブ「国連共同調整センター」によれば、輸出が再開された前年 8 月 1 日から 12 月 31 日までの黒海港湾からのとうもろこし輸出量は 740 万トン、輸出先国は、中国（169 万トン）、スペイン（136 万トン）、イタリア（85 万トン）、トルコ（63 万トン）等である。

なお、国連、ウクライナ、ロシア、トルコの 4 者によるウクライナ産穀物の黒海経由での輸出再開に関する合意は、再度 120 日延長され、2023 年 3 月 19 日までとされている。

また、2022/23 年度の期末在庫量は、前月予測から 1.5 百万トン下方修正されたものの、前年度より 5.9%増の 5.4 百万トンで、依然として高水準の見込み。

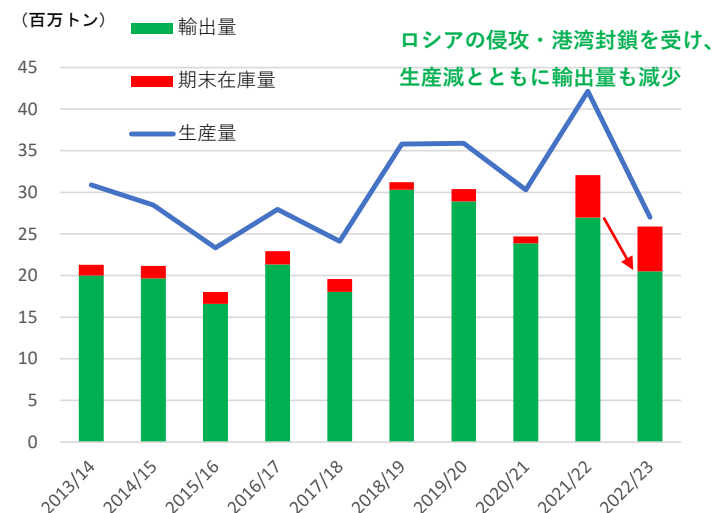
とうもろこしーウクライナ

(単位：百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年10月～23年9月)			
			予測値、() は IGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	30.3	42.1	27.0 (25.5)	-	▲ 35.9	
消 費 量	7.1	10.9	6.2 (8.9)	▲ 1.5	▲ 43.1	
うち飼料用	5.9	9.7	5.0 (5.5)	▲ 1.5	▲ 48.5	
輸 出 量	23.9	27.0	20.5 (19.0)	3.0	▲ 24.0	
輸 入 量	0.0	0.0	0.0 (0.0)	-	▲ 100.0	
期末在庫量	0.8	5.1	5.4 (4.5)	▲ 1.5	5.9	
期末在庫率	2.7%	13.4%	20.2% (16.3%)	▲ 7.2	6.8	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	5.40	5.49	4.00 (4.00)	-	▲ 27.1	
単収(t/ha)	5.62	7.68	6.75 (6.38)	-	▲ 12.1	

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 January 2023)
IGC 「Grain Market Report」(12 January 2023)

図：とうもろこしの生産量、輸出量、期末在庫量の推移



資料：USDA 「PS&D」 (2023. 1. 12) をもとに農林水産省にて作成。

3 コメ

(1) 国際的なコメ需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し>

2022/23 年度

生産量

前年度比



前月比



- ・インド等で上方修正も、中国、米国等で下方修正され、前月から下方修正された。

消費量

前年度比



前月比



- ・米国等で上方修正も、中国等で下方修正され、前月から下方修正された。

輸出量

前年度比



前月比



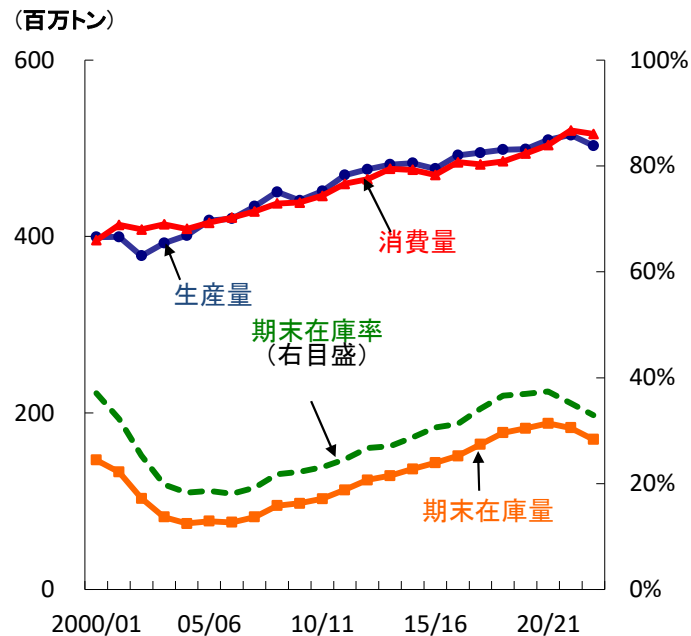
- ・米国等で下方修正も、インド、ブラジル等で上方修正され、前月から上方修正された。

期末在庫量

前年度比



前月比



資料：USDA「PS&D」（2023.1.12）をもとに農林水産省にて作成

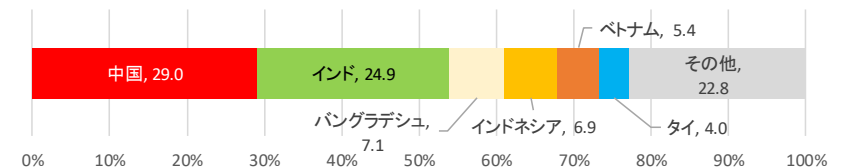
◎世界のコメ需給

(単位：百万精米トン)

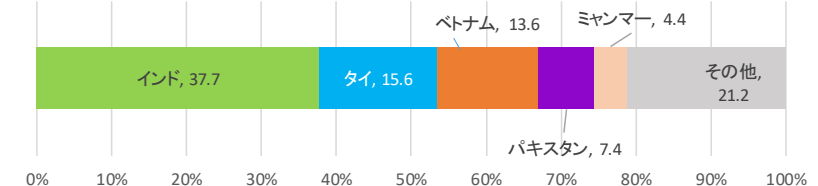
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	509.3	515.0	503.0	▲ 0.3	▲ 2.3
消 費 量	503.6	520.1	516.1	▲ 0.8	▲ 0.8
輸 出 量	51.2	56.8	54.3	0.6	▲ 4.4
輸 入 量	46.4	54.7	53.3	0.9	▲ 2.5
期末在庫量	188.3	183.1	170.0	1.3	▲ 7.2
期末在庫率	37.4%	35.2%	32.9%	0.3	▲ 2.3

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」（12 January 2023）

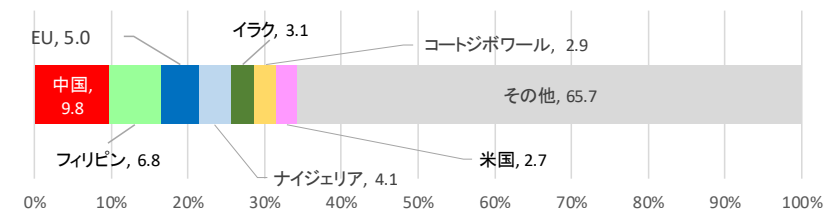
○ 2022/23年度 世界のコメの生産量(503.0百万トン) (単位：%)



○ 2022/23年度 世界のコメの輸出量(54.3百万トン) (単位：%)



○ 2022/23年度 世界のコメの輸入量(53.3百万トン) (単位：%)



(2) 国別のコメの需給動向

< 米国 > 生産量減少により長粒種の価格が更に上昇、輸出量は減少

【生育・生産動向】USDAによれば、2022/23年度の実産量は、前月予測から0.1百万トン下方修正され、長粒種、中・短粒種とも収穫面積及び単収の減少により、対前年度比16.3%減の5.1百万トンと、1993/94年度以来の低水準となる見込み。収穫面積は、対前年度比で12.9%減少し、1983/84年度以来の低水準となる見込み。このうち長粒種については、主産地であるミシシッピ川下流域において、農業資材の高騰、大豆等の収益性がより高いこと、降雨過多による作付け減少により、アーカンソー州等で収穫面積が減少し、生産量は407万トン（対前年比11.5%減）の見通し。また、中・短粒種の国内生産の75%を占めるカリフォルニア州では、厳しい干ばつの長期化による灌漑用水不足や取水制限により、2年連続で収穫面積が減少し、生産量は102万トン（同31.5%減）の見通し。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の実消費量は、2022年8月から11月の消費量の予想を上回る増加により、前月予測から0.2百万トン上方修正されたものの、生産量の減少による供給量減少から、対前年度比2.7%減の4.7百万トンの見込み。

2022/23年度の実輸入量は、前月予測からの変更はなく、対前年度比19.2%増の1.4百万トンと史上最高の見込み。アジアからの香り米が輸入の大半を占めている。国内消費量に占める輸入の割合は30%以上と、史上最高となる見込み。

2022/23年度の実輸出量は、特に長粒種の輸出価格高騰による輸出競争力の低下見込み等から、前月予測から0.1百万トン下方修正され、対前年度比19.5%減の2.1百万トンと、1985/86年度以来の低水準の見込み。

USDA「Rice Outlook」（2023.1.17）によれば、長粒種の価格は供給量の減少によりここ数か月間高止まりしており、1月10日までの週のイラク向け長粒種（2等、砕米4%混入）は735ドル/トンと、前月から5ドル/トン上昇し、2008年10月初旬（772ドル/トン）以来の高値となっている。また、中粒種の価格は、地中海向けカリフォルニア米（1等、砕米4%混入）が1,650ドル/トンと、前月から25ドル/トン上昇し、供給不足のため史上最高を更新した。（右図参照）

コメー米国

主に長粒種はミシシッピ川沿いで栽培、中・短粒種のシェアは1/4
米国のコメ生産に占めるカリフォルニア州のシェアは約2割

（単位：百万精米トン）

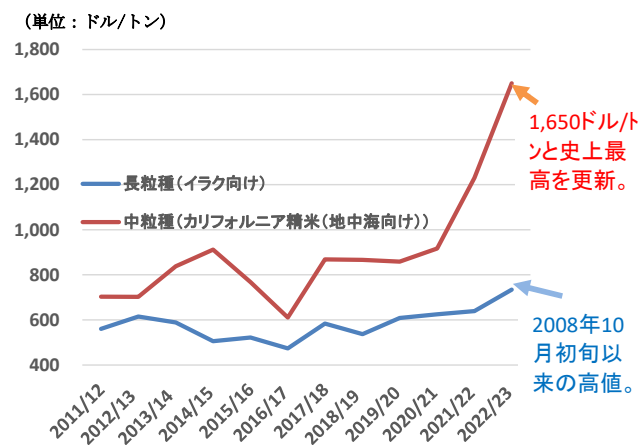
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年8月～23年7月)		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	7.2	6.1	5.1	▲ 0.1	▲ 16.3
消費量	4.9	4.8	4.7	0.2	▲ 2.7
輸出量	3.0	2.6	2.1	▲ 0.1	▲ 19.5
輸入量	1.1	1.2	1.4	-	19.2
期末在庫量	1.4	1.3	1.0	▲ 0.2	▲ 19.0
期末在庫率	17.8%	17.0%	15.1%	▲ 3.0	▲ 1.9

(参考)

収穫面積(百万ha)	1.21	1.01	0.88	-	▲ 12.9
単収(もみt/ha)	8.54	8.64	8.28	▲ 0.18	▲ 4.2

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」（12 January 2023）

図：米国の長粒種と中粒種の輸出価格の推移



資料：USDA「Rice Outlook」（2023.1.17）より。価格は年度内の平均価格。

なお、2022/23年度は2023年1月の価格。

< インド > ラビ米の作付けは前年度よりも速いペースで進捗

【生育・生産動向】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、北東部（カリフ米の主産地）で前年9～10月の降雨により単収が改善したため、前月予測から1.0百万トン上方修正されたものの、モンスーン期の降雨の遅れによる作付け減少により、対前年度比4.1%減の125.0百万トンの見込み。

前年10月下旬からはほぼ全土が乾季に入ったが、9～10月の降雨が例年より多かったことから、ガンジス川流域のラビ米の作付けは前年同時期より速いペースで進んでいる。

インド農業農民福祉省（2023.1.13）によると、ラビ米の作付け済面積は、1月13日時点で262.2万ヘクタールと、前年度同期（196.2万ヘクタール）に比べて66.0万ヘクタール増加。過去5年平均（2016/17-2020/21年度：477.1万ヘクタール）に対する進捗率は55.0%。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、史上最高となった対前年度より2.5%減の108.5百万トンとなる見込み。なお、前年度に引き続き政府の低所得世帯向け食料配給プログラム（インドの人口の3分の2（約9億人）を対象としている）向けにコメを放出していることもあり、依然として史上2番目の消費量となる見込み。

2022/23年度の輸出量は、2022年の輸出量の予想以上の増加により、前月予測から0.5百万トン上方修正されたものの、生産量減少により対前年度比6.9%減の20.5百万トンの見込み。

なお、インドは、カリフ米の生産減少による国内価格高騰を防止する観点から、9月9日に輸出規制（碎米（100%）の輸出禁止及びバスマティ米・パーボイルド米以外のコメへの輸出税課税（20%））を発動。ただし、輸出税賦課後の輸出価格に競争力があるため、依然として世界の輸出量の38%を占め、世界第1位の輸出国となる見込み。

同「Grain: World Markets and Trade」（2023.1.12）によれば、インド産米（碎米5%混入）の1月10日までの週の価格は、395ドル/トンと、前月から5ドル/トン下落し、依然アジア主要輸出国の中で最低価格水準となっている（P.20の「長粒種のFOB価格の推移」を参照）。

2022/23年度の期末在庫量は、生産量の上方修正に伴い前月予測から0.5百万トン上方修正されたものの、対前年度比11.8%減の30.0百万トンの見込み。

コメーインド

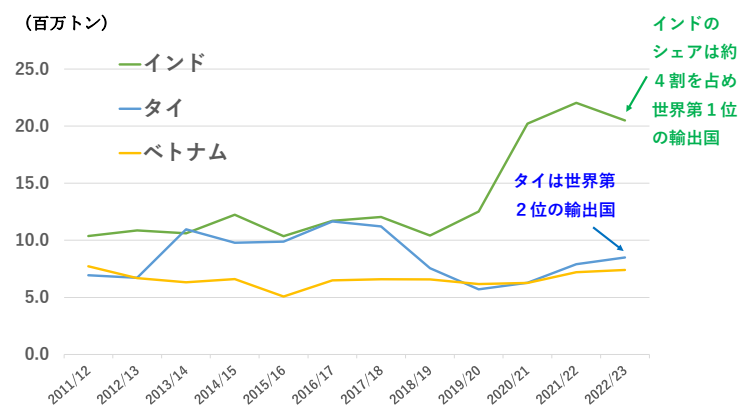
雨季をカリフ、乾季をラビと呼ぶ。北部はカリフ・ラビ（小麦）の二毛作、南部はカリフ・ラビの二期作。主にインディカを栽培

（単位：百万精米トン）

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年10月～23年9月)			
			予測値、()はIGC		前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	124.4	130.3	125.0	(123.8)	1.0	▲ 4.1
消 費 量	101.1	111.3	108.5	(109.0)	-	▲ 2.5
輸 出 量	20.2	22.0	20.5	(17.7)	0.5	▲ 6.9
輸 入 量	0.0	0.0	0.0	(0.0)	-	-
期末在庫量	37.0	34.0	30.0	(30.0)	0.5	▲ 11.8
期末在庫率	30.5%	25.5%	23.3%	(23.7%)	0.3	▲ 2.3
(参考)						
収穫面積(百万ha)	45.77	46.38	45.50	(45.00)	-	▲ 1.9
単収(もみt/ha)	4.08	4.21	4.12	(2.75)	0.03	▲ 2.1

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 January 2023)
IGC「Grain Market Report」(12 January 2023)（単収は精米t/ha）

図：世界のコメの主要輸出国の輸出量の推移



資料：USDA「PS&D」（2023.1.12）をもとに農林水産省にて作成

< 中国 > 南部の干ばつ等で減産

【生育・生産動向】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、中国国家統計局「2022年糧食生産量データ」（2022.12.12）での播種面積の引き下げにより、前月予測から1.1百万トン下方修正され、対前年度比2.0%減の146.0百万トンと、2013/14年度以来の低水準となる見込み。

なお、上記中国国家統計局データによれば、2022年の水稻の播種面積は29.5百万ヘクタールと、対前年比1.6%減少した。単収は7.1トン/ヘクタールと、南部の高温干ばつの影響により、対前年比0.5%減少した。生産量（もみベース）は208.5百万トンと、対前年比2.0%減少した。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、生産量の下方修正に伴い前月予測から1.1百万トン下方修正され、飼料用米の消費量の減少から、対前年度比1.5%減の154.0百万トンとなる見込み。

2022/23年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく、砕米の主要輸入先国であるパキスタンの洪水による生産減少見通し及びインドのコメ輸出規制により、対前年度比12.6%減の5.2百万トンの見込み。これまで中国は、とうもろこし等飼料用穀物の価格高騰を背景に、飼料用等として低価格の砕米をインド等から輸入してきた。

中国海関統計によれば、2022年1～11月の輸入量は、前年同期の434.9万トンから32.1%増加し、574.6万トンとなった。輸入先はインドが216.0万トンと最も多く、対前年同期比で110.7%増加。次いでパキスタンが114.8万トン（対前年同期比44.1%の増加）となっている。なお、11月の輸入量については、インドの輸出規制及びパキスタンの洪水による減産の影響から、前年同月比で3割以上減少している。

USDAによれば、2022/23年度の期末在庫量は、前月予測からの変更はなく、対前年度比4.4%減の108.0百万トンの見込み。なお、世界の期末在庫量のうち、中国が依然として約6割を占める見通し。

コメー中国

北部で一期作、南部で二期作。ジャポニカ（粳）米は東北地区、江蘇省等で栽培、生産シェアは3割程度

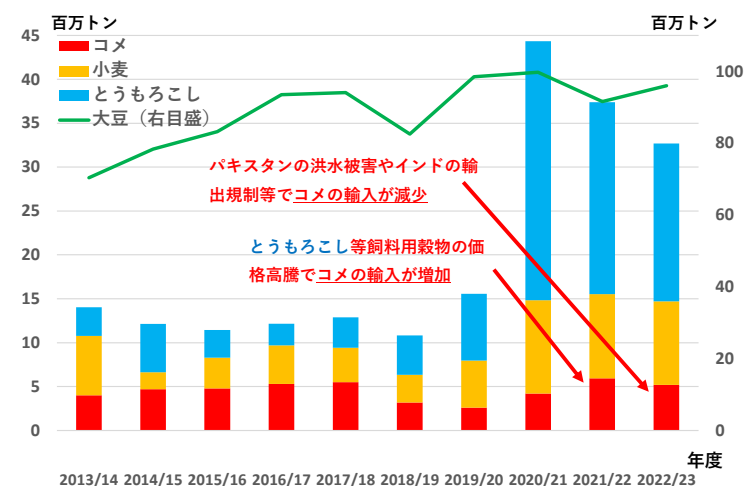
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年7月～23年6月)			
			予測値、()はIGC	前月予測からの変更	対前年度増減率(%)	
生 産 量	148.3	149.0	146.0 (146.0)	▲ 1.1	▲ 2.0	
消 費 量	150.3	156.4	154.0 (151.1)	▲ 1.1	▲ 1.5	
輸 出 量	2.2	2.1	2.2 (2.2)	-	5.8	
輸 入 量	4.2	6.0	5.2 (3.4)	-	▲ 12.6	
期末在庫量	116.5	113.0	108.0 (104.2)	-	▲ 4.4	
期末在庫率	76.4%	71.3%	69.2% (68.0%)	0.5	▲ 2.2	

(単位：百万精米トン)

収穫面積(百万ha)	30.08	29.92	29.45 (30.03)	▲ 0.55	▲ 1.6
単収(もみt/ha)	7.04	7.11	7.08 (4.86)	0.08	▲ 0.4

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 January 2023)
IGC「Grain Market Report」(12 January 2023) (単収は精米t/ha)

図：中国のコメ、小麦、とうもろこし、大豆の輸入量の推移



資料：USDA「PS&D」(2023.1.12)をもとに農林水産省にて作成

< タイ > 東南アジアや中東向けの輸出が好調

【生育・生産動向】USDAによれば、2021/22年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、良好な天候と十分な降雨により、対2020/21年度比5.3%増の19.9百万トンの見込み。なお、2022年8月から10月までの台風や洪水の被害は限定的であった。

2022/23年度の見込みも、前月予測からの変更はなく、収穫面積が拡大すると予測されることから、対前年度比1.1%増の20.1百万トンの見込み。背景には、輸出価格上昇が農家の作付け意欲を刺激していることもあると推測される。なお、タイ全土は乾季に入っているものの、1月上旬から中旬にかけてタイ東部に散発的な降雨があり、灌漑用水が補充されたため、乾季米の生育に良好な状況になっているとみられる。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、競争相手であるインドやパキスタンの輸出減少から、対前年度比7.6%増の8.5百万トンとなる見込み。2018/19年度以来の高水準となり、インドに次ぐ世界第2位のコメ輸出国となる見通し。

2021/22年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、対2020/21年度比25.9%増の7.9百万トンの見込み。

タイ米輸出業者協会によれば、2022年1～10月の輸出量は、前年同期の466.3万トンから33.1%増加し、620.3万トンとなった。輸出先はイラクが131.0万トン（前年度比6.2倍）、南アフリカが64.2万トン（前年度並み）、米国が54.6万トン（前年度比1.3倍）、中国が53.1万トン（前年度比1.2倍）。また、本年1月に、最近のバーツ高を受け、2022/23年度の輸出目標を0.5百万トン引き下げ7.5百万トンとした。

USDA「Rice Outlook」（2023.1.17）によれば、1月10日までの週のタイ産米（長粒、2等精米）の輸出価格は、バーツ高及び主要な東南アジア・中東諸国からの堅調な需要により、前月から41ドル上昇し2021年3月以来の水準である495ドル/トンとなった（P.20の「長粒種のFOB価格の推移」を参照）。背景として、インドネシアが政府備蓄の不足に対処するため輸入を拡大していること、イラクが検疫問題で7年間停止していたタイ産米の輸入を2022年に再開したことなどもあるとみられる。

コメ・タイ

夏の雨季作と冬の乾季作で行われる。主にインディカ米を栽培

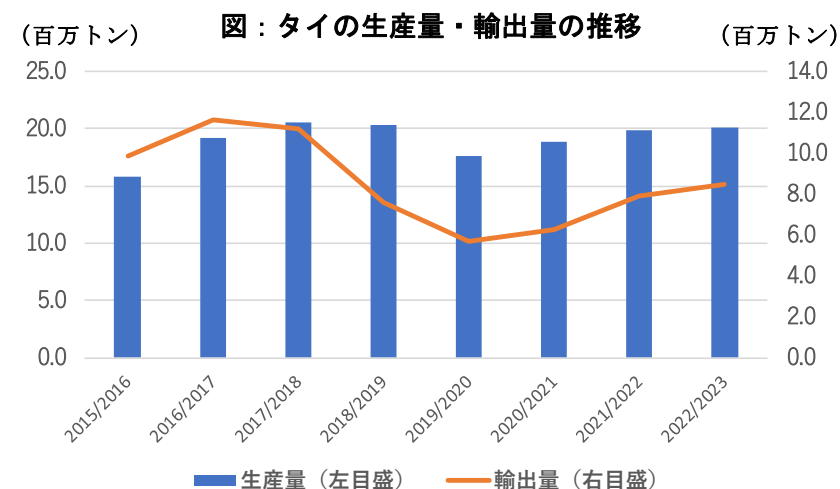
（単位：百万精米トン）

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (23年1月～23年12月)		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	18.9	19.9	20.1 (20.2)	-	1.1
消 費 量	12.7	12.8	12.8 (12.3)	-	-
輸 出 量	6.3	7.9	8.5 (8.5)	-	7.6
輸 入 量	0.2	0.1	0.2 (0.3)	-	15.4
期末在庫量	4.0	3.3	2.2 (6.6)	▲ 0.3	▲ 32.0
期末在庫率	21.0%	15.8%	10.5% (31.9%)	▲ 1.4	▲ 5.4

(参考)

収穫面積(百万ha)	10.51	10.70	10.85	(10.85)	-	1.4
単収(もみt/ha)	2.72	2.81	2.81	(1.86)	-	-

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 January 2023)
IGC「Grain Market Report」(12 January 2023)（単収は精米t/ha）



資料：USDA「PS&D」(2023.1.12)をもとに農林水産省にて作成

< ベトナム > 秋冬作の収穫終了による供給減少等から価格が上昇

【生育・生産動向】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、対前年度比1.1%増の27.2百万トンの見込み。

2021/22年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、収穫面積が5年連続で減少し、2006/07年度以来の低水準となったことから、対2020/21年度比1.8%減の26.9百万トンの見込み。なお、高収益作物（果物・野菜・養殖）への転換等により、冬春作の収穫面積が減少したことや、メコン川の水量低下に伴う海水逆流による塩害の発生が、長期的な面積減少の主要因となっている。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2021/22年度の輸出量は、2022年12月末にベトナム政府が公表したデータに基づき、前月予測から0.2百万トン下方修正され、対2020/21年度比14.3%増の7.2百万トンの見込み。

2022/23年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、対前年度比2.8%増の7.4百万トンの見込み。

ベトナム税関総局によれば、2022年1～11月の輸出量は668.4万トンで、上位からフィリピン（300.5万トン）、中国（80.8万トン）、コートジボワール（65.7万トン）となっている。うち、ジャポニカ米は25.9万トンと約4%を占める。

USDAによれば、2022/23年度の輸入量は、主要輸入先であるカンボジアからの輸入量が予想以上に増加したことから、前月予測より0.3百万トン上方修正されたものの、ベトナムのコメ輸入量の4割近くを占めていたインドの輸出規制等により、対前年度比33.3%減の1.0百万トンの見込み。

USDA「Grain: World Markets and Trade」（2023.1.12）によれば、ベトナム産米（長粒種、5%碎米混入）の1月10日までの週の価格は、秋冬作の収穫終了による供給減少とベトナム・ドン高から、前月の価格から23ドル/トン上昇して474ドル/トンと、高水準となった。

コメベトナム

北部で二期作、南部で二期作・三期作。主に長粒種、一部で短粒種も栽培

（単位：百万精米トン）

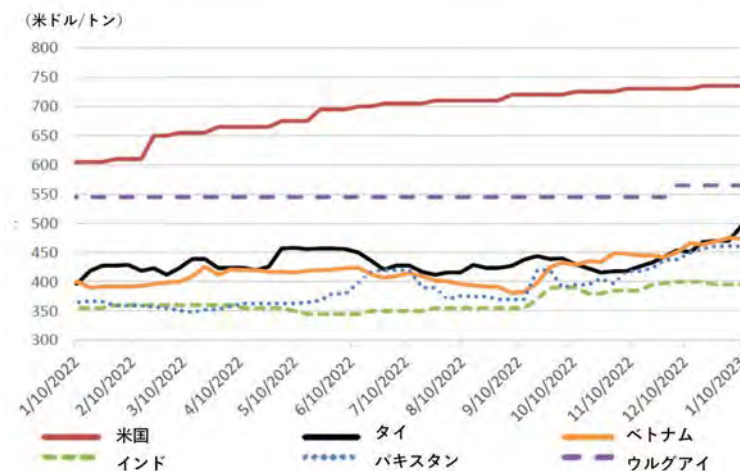
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (23年1月～23年12月)			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	27.4	26.9	27.2 (28.3)	-	1.1	
消 費 量	21.5	21.5	21.5 (22.7)	-	-	
輸 出 量	6.3	7.2	7.4 (7.2)	-	2.8	
輸 入 量	1.8	1.5	1.0 (0.9)	0.3	▲ 33.3	
期末在庫量	2.6	2.4	1.7 (2.1)	0.6	▲ 28.2	
期末在庫率	9.5%	8.3%	5.9% (7.0%)	2.1	▲ 2.4	

(参考)

収穫面積(百万ha)	7.31	7.27	7.28 (7.22)	-	0.1
単収(もみt/ha)	6.00	5.93	5.99 (3.92)	-	1.0

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 January 2023)
IGC「Grain Market Report」(12 January 2023)（単収は精米t/ha）

図：長粒種のFOB価格の推移



資料：USDA「Grain：World Markets and Trade」（2023.1.12）より。

Ⅱ 油糧種子 大豆

(1) 国際的な大豆需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し> 2022/23 年度

生産量 前年度比 ↑ 前月比 ↓

・中国、ブラジルで上方修正も、アルゼンチン、米国等で下方修正され、前月から下方修正された。史上最高の見込み。

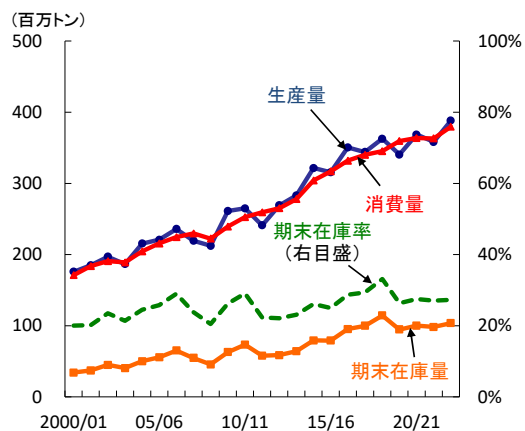
消費量 前年度比 ↑ 前月比 ↓

・ブラジル等で上方修正も、アルゼンチン等で下方修正され、前月から下方修正された。史上最高の見込み。

輸出量 前年度比 ↑ 前月比 ↓

・ブラジル等で上方修正も、アルゼンチン、米国等で下方修正され、前月から下方修正された。史上最高の見込み。

期末在庫量 前年度比 ↑ 前月比 ↑



資料：USDA「PS&D」(2023. 1. 12)をもとに農林水産省で作成

◎世界の大豆需給

(単位：百万トン)

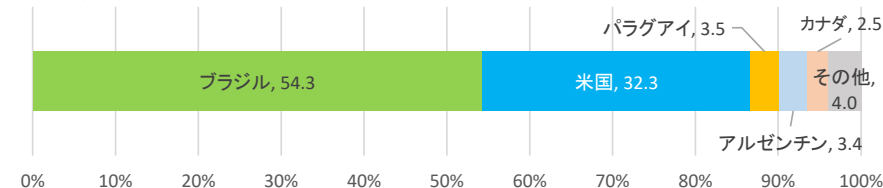
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23		
			予測値	前月予測からの 変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	368.5	358.1	388.0	▲ 3.2	8.4
消 費 量	363.8	363.2	379.5	▲ 1.4	4.5
うち搾油用	315.4	314.2	327.3	▲ 2.0	4.2
輸 出 量	165.0	153.9	167.5	▲ 1.8	8.9
輸 入 量	165.6	157.1	164.3	▲ 1.9	4.6
期末在庫量	100.0	98.2	103.5	0.8	5.4
期末在庫率	27.5%	27.0%	27.3%	0.3	0.2

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(12 January 2023)

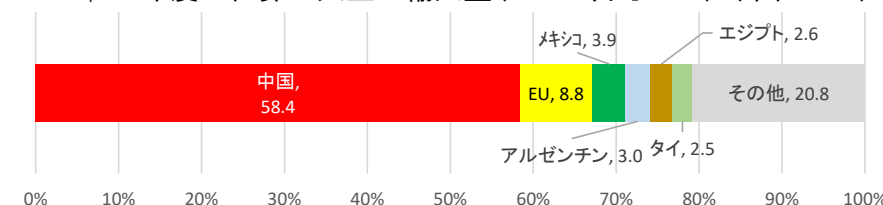
○ 2022/23 年度の世界の大豆の生産量(388.0 百万トン) (単位：%)



○ 2022/23 年度の世界の大豆の輸出量(167.5 百万トン) (単位：%)



○ 2022/23 年度の世界の大豆の輸入量(164.3 百万トン) (単位：%)



(2) 国別の大豆の需給動向

< 米国 > 生産量は減産、輸出減の見通し

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、夏季のコーンベルトの一部での高温・乾燥の影響からミズーリ州、インディアナ州、イリノイ州、カンザス州、ネブラスカ州等での収穫面積及び単収の下方修正に伴い、前月予測から 1.9 百万トン下方修正され、前年度より 4.2%減の 116.4 百万トンの見通し。

前年 11 月中旬時点で、収穫は例年より早いペースでほぼ終了した。

【需要状況】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、種子等のその他需要が前月予測から 0.1 百万トン下方修正され、前年度より 2.5%増の 64.4 百万トンで史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸出量は、生産量の下方修正、中国の輸入需要の減退、ブラジルの輸出拡大を背景に、前月予測から 1.5 百万トン下方修正され、前年度より 7.8%減の 54.2 百万トンの見込み。

USDAによれば、2022 年輸出検証高 (2022 年 1 月 6 日～2023 年 1 月 5 日) は、55.3 百万トンであり、内訳は中国 (30.3 百万トン)、メキシコ (5.5 百万トン)、エジプト (2.9 百万トン)、ドイツ (2.6 百万トン)、日本 (2.3 百万トン) の順。

USDAによれば、2022/23年度の期末在庫量は、生産量の下方修正が消費量及び輸出量の下方修正を上回ったことで、前月予測から 0.3 百万トン下方修正され、前年度より 23.4%減の 5.7 百万トンの見込み。

なお、期末在庫率は 4.8%で、前年度を下回っており、2013/14 年度 (2.6%) 以来の低水準の見込み。

米国の輸出価格は、前年 12 月以降、アルゼンチンの干ばつ懸念や国内輸送費の上昇等からブラジル産に比べ割高で推移している。(右図参照)

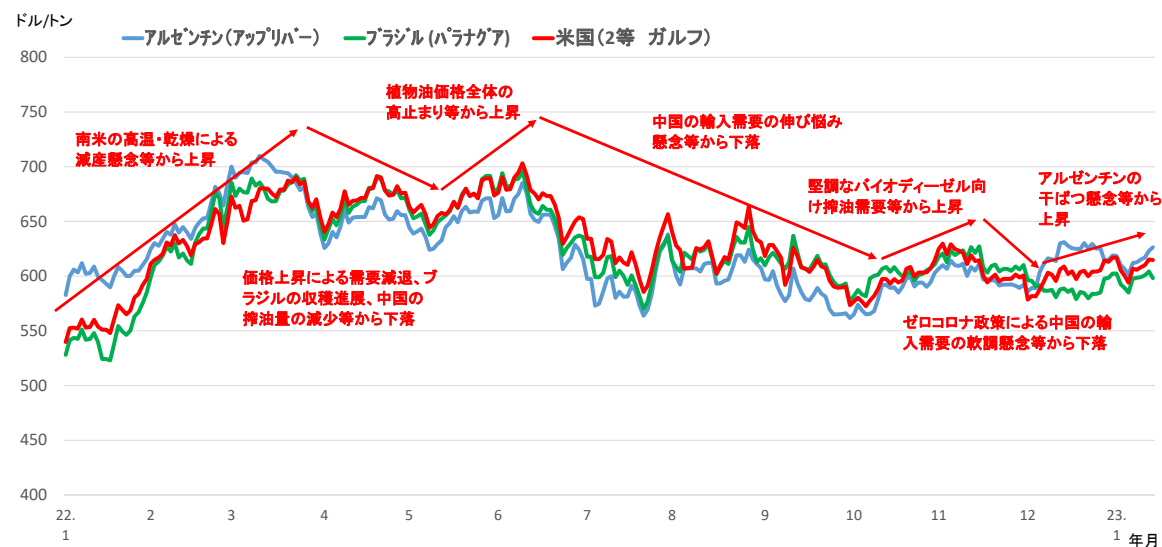
大豆－米国

(単位：百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年9月～23年8月)		
			予測値	前月予測から の変更	対前年度 増減率(%)
生産量	114.8	121.5	116.4	▲ 1.9	▲ 4.2
消費量	60.9	62.8	64.4	▲ 0.1	2.5
うち搾油用	58.3	60.0	61.1	－	1.9
輸出量	61.7	58.7	54.2	▲ 1.5	▲ 7.8
輸入量	0.5	0.4	0.4	－	▲ 4.7
期末在庫量	7.0	7.5	5.7	▲ 0.3	▲ 23.4
期末在庫率	5.7%	6.1%	4.8%	▲ 0.2	▲ 1.3
(参考)					
収穫面積(百万ha)	33.43	34.93	34.94	▲ 0.12	0.0
単収(t/ha)	3.43	3.48	3.33	▲ 0.04	▲ 4.3

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 January 2023)

図：米国、ブラジル、アルゼンチンの大豆輸出価格 (FOB) の推移



資料：IGCのデータをもとに農林水産省にて作成

＜ ブラジル ＞ 生産量、輸出量ともに史上最高の見通し

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、中西部の主産地での収穫面積の上方修正により、前月予測から1.0百万トン上方修正され、前年度より18.1%増の153.0百万トンと史上最高の見込み。なお、収穫面積は、特に中西部のマット・グロッソ州（最大生産州）、ゴイアス州等で増加見込み。

また、ブラジル食料供給公社(CONAB)月例報告(2023.1.12)によれば、2022/23年度の実産量は、中西部の主産地の天候に恵まれ、ラニーニャ現象を背景に南部の州を中心に深刻な高温・乾燥の影響を受けた前年度より21.6%増の152.7百万トンで史上最高の見込み。

1月上旬から中旬にかけて、南部では高温・乾燥傾向が続いているものの、産地の大半で降雨に恵まれ、順調に生育している。南部のパラナ州で1月9日現在、少なくとも85%が生殖生長期に入っている。南部のリオ・グランデ・ド・スール州で1月12日現在、作付進捗率は96%で、開花段階は20%。

【需要状況】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、生産量の上方修正に伴い、前月予測から0.8百万トン上方修正され、前年度より4.9%増の56.1百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸出量は、生産量の上方修正や米国、アルゼンチンの輸出競争力低下により前月予測から1.5百万トン上方修正され、前年度より15.0%増の91.0百万トンと史上最高の見込み。

ブラジル貿易統計によれば、2022年1～12月の輸出量は78.9百万トンで、前年同期(86.1百万トン)に比べ8.3%減となっている。内訳は、1位が中国53.7百万トン、2位がスペイン3.3百万トン、3位がタイ2.8百万トンとなっている。なお、12月の輸出量は2.0百万トンで前年同月(2.7百万トン)と比べ、25.5%減となっている。

大豆－ブラジル

(単位：百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年10月～23年9月)			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	139.5	129.5	153.0 (149.0)	1.0	18.1	
消 費 量	49.9	53.5	56.1 (54.6)	0.8	4.9	
うち搾油用	46.7	50.3	52.5 (51.5)	0.8	4.5	
輸 出 量	81.7	79.1	91.0 (90.9)	1.5	15.0	
輸 入 量	1.0	0.5	0.8 (0.4)	-	38.9	
期末在庫量	29.4	26.8	33.5 (5.6)	1.8	24.8	
期末在庫率	22.4%	20.2%	22.7% (3.8%)	0.9	2.5	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	39.50	41.50	43.40 (42.89)	0.50	4.6	
単収(t/ha)	3.53	3.12	3.53 (3.47)	▲ 0.01	13.1	

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 January 2023)
IGC「Grain Market Report」(12 January 2023)

ブラジルのクロップカレンダー(中部から南部)

2022/23年度の大豆の作付けは、2022年9月以降、順次開始。
2023年2月以降、大豆の収穫が行われ、その後、一部の圃場で冬とうもろこしを栽培予定。

2022/23年度	2022年												2023年								
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月
夏とうもろこし																					
冬とうもろこし																					
大豆																					

資料：CONAB穀物レポート (2023.1.12)

< アルゼンチン > 干ばつが生産量に影響を与える懸念（輸出税継続）

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、前年10月から12月にかけて高温・乾燥天候が続いた影響に加え、早植え大豆から、一般的に収量が劣るとされる遅植え大豆に作付けが移行したことなどから、単収、収穫面積が下方修正されたことにより、前月予測から4.0百万トン下方修正された。しかし、収穫面積及び単収が前年度より増加することから、高温・乾燥の影響を大きく受けた前年度より3.6%増の45.5百万トンの見込み。

ブエノスアイレス穀物取引所週報（2023.1.19）によれば、2022/23年度の作付進捗率は96%で、主産地での長引く高温・乾燥により、過去5年平均（98%）より2ポイント遅れている。生育は悪く、病害・開花不良等が報告されている。また、生産量は、41.0百万トンと前年度（43.0百万トン）から減少する見通し。過去60年間で最悪の干ばつともいわれており、ラニーニャ現象に伴う今後の乾燥天候の影響に注意が必要。

【需要状況】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、生産量の下方修正に伴い、前月予測から1.8百万トン下方修正され、前年度より1.7%減の45.3百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸出量は、生産量の下方修正に伴い、前月予測から2.0百万トン下方修正されたものの、前年度より2倍の5.7百万トンの見込み。この背景は、外貨獲得のために大豆及び大豆製品輸出に適用された前年9月末までの為替優遇措置に続き、11月28日から前年末まで為替優遇措置を再導入したことで、一時的に輸出が堅調に推移したことによる。

アルゼンチン国家統計局によれば、2022年1～11月の輸出量は541.5万トンで、前年同期（536.5万トン）より0.9%増。内訳は、1位が中国488.0万トン、2位が米国12.4万トン、3位がチリ5.2万トン。

アルゼンチンは、丸大豆の搾油後に発生する大豆加工品の輸出が多く、大豆油及び大豆粕については、世界第1位の輸出国である。

アルゼンチン政府は、財政赤字の補填等のため、輸出税を設定している。2021年1月以降、輸出税を大豆最大33%、大豆油及び大豆粕31%に設定。2022年3月19日に、大豆油及び大豆粕の輸出税について2022年末まで2%引き上げたが、2023年1月からは31%に戻っている。

大豆ーアルゼンチン

（単位：百万トン）

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年10月～23年9月)			
			予測値、()はIGC		前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	46.2	43.9	45.5	(42.0)	▲ 4.0	3.6
消 費 量	47.4	46.0	45.3	(44.1)	▲ 1.8	▲ 1.7
うち搾油用	40.2	38.8	38.0	(38.6)	▲ 1.8	▲ 2.1
輸 出 量	5.2	2.9	5.7	(3.9)	▲ 2.0	99.3
輸 入 量	4.8	3.8	5.0	(5.4)	0.2	30.2
期末在庫量	25.1	23.9	23.5	(1.7)	▲ 0.1	▲ 1.9
期末在庫率	47.6%	48.9%	46.0%	(3.4%)	3.1	▲ 2.8
(参考)						
収穫面積(百万ha)	16.47	15.90	16.30	(16.40)	▲ 0.20	2.5
単収(t/ha)	2.81	2.76	2.79	(2.56)	▲ 0.21	1.1

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」

「World Agricultural Production」(12 January 2023)

IGC「Grain Market Report」(12 January 2023)

写真：北部サンタフェ州の大豆の圃場風景

（1月4日撮影）

前年11月上旬に作付けされ、収穫は3月下旬の予定。
草丈が低く、干ばつ被害を受け、生育は不十分。



< 中国 > 生産量、消費量は史上最高、輸入量も増加見通し

【生産・生育状況】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、前年12月に中国国家統計局が発表したデータを反映し、前月予測から1.9百万トン上方修正され、主産地の黒竜江省等東北地区で生育期を通じて良好な天候に恵まれたことに加え、政府の補助金による大豆生産奨励策等で収穫面積が大幅に増加したことから、前年度より24.0%増の20.3百万トンで史上最高の見込み。

前年11月上旬時点で、収穫はすでに終了。

【需要状況】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、食用など搾油用以外の需要が上方修正された一方、前年12月までの搾油需要が予想以上に低調であったことから前月予測から0.3百万トン下方修正されたものの、畜産向け国内大豆粕需要が前年度（景気減速により豚肉を中心に食肉需要が低調）から回復することにより、前年度より8.1%増の116.3百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸入量は、生産量の上方修正に伴い、前月予測から2.0百万トン下方修正されたものの、前年度より4.8%増の96.0百万トンの見込み。

中国の貿易統計によれば、2022年1～11月の輸入量は80.5百万トンと、前年同期比で8.1%減。内訳は、ブラジル産51.8百万トン（64%）、米国産23.5百万トン（29%）。なお、11月は、米国の収穫の終了に伴い、ブラジル産の輸入を上回った。

農業農村部「農産品供需形勢分析月報 2022年11月号」によると、前年11月の国内価格（山東省の国産大豆工場渡し価格）は、前月（6,480元/トン）から下落し、6,340元/トンとなった。主な要因としては、国産大豆の供給は比較的余裕があった一方で、ほとんどの市場関係者は必要分のみを仕入れ、需要が低下したことによる。今後、新穀大豆の豊作と消費需要の低迷で、引き続き低水準で推移するとみられる。前年11月の輸入価格（山東省の輸入大豆価格）は、ブラジル大統領選をめぐる物流の混乱や大豆油価格等の急上昇の影響で、5,640元/トンと前月（5,600元/トン）から上昇した。今後の中国の輸入動向に注視が必要である。

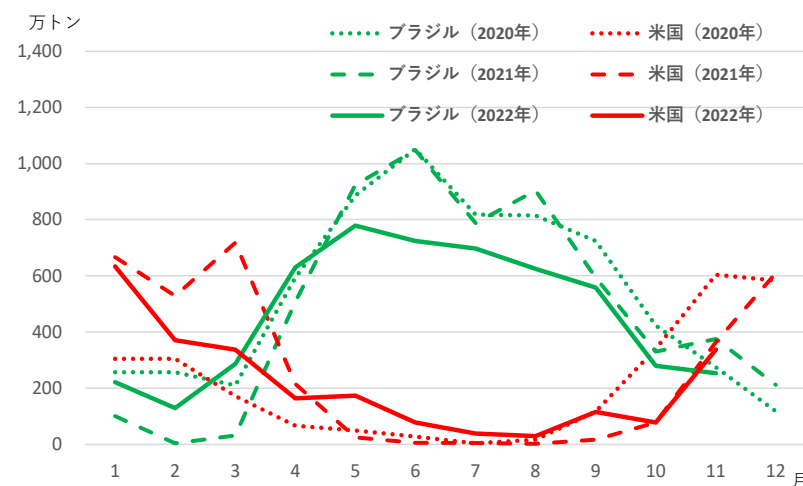
大豆－中国

（単位：百万トン）

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年10月～23年9月)			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	19.6	16.4	20.3 (20.3)	1.9	24.0	
消 費 量	112.7	107.6	116.3 (114.7)	▲ 0.3	8.1	
うち搾油用	93.0	87.5	95.0 (95.8)	▲ 1.0	8.6	
輸 出 量	0.1	0.1	0.1 (0.1)	－	－	
輸 入 量	99.7	91.6	96.0 (96.0)	▲ 2.0	4.8	
期末在庫量	31.2	31.4	31.3 (30.5)	▲ 0.2	▲ 0.2	
期末在庫率	27.6%	29.2%	26.9% (26.6%)	▲ 0.1	▲ 2.2	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	9.88	8.42	10.27 (9.90)	0.92	22.0	
単収(t/ha)	1.98	1.95	1.98 (2.05)	0.01	1.5	

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 January 2023)
IGC「Grain Market Report」(12 January 2023)

図：中国におけるブラジル、米国産大豆の輸入状況



出典：中国海関統計

注：2020年1月分と2月分は合計で公表されたため、便宜上1/2で按分

< カナダ > 収穫面積は減少も、単収の増加により増産

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、収穫面積は減少するものの、単収の増加から前年度より4.3%増の6.5百万トンの見込み。前年11月中旬時点で、収穫は終了。

なお、カナダ農務農産食品省(AAFC)「Outlook for Principal Field Crops」(2023.1.20)によれば、2022/23年度の収穫面積は前年度より0.7%減少した。一方、単収は、西部カナダで生育期の降雨と温暖な天候に恵まれたことから、カナダ全体の単収は前年度より5.1%増となった。前年度において高温・乾燥で減産となった生産量第2位のマニトバ州で前年度より58.7%増と史上最高の単収となり、生産量1位のカナダ東部のオンタリオ州の単収の減少をカバーしたことが要因。この結果、生産量は前年度より4.3%増の6.5百万トンの見込み。

また、この春に作付けされる2023/24年度の実産量は、現在の市場状況と過去の傾向に基づけば、作付面積の増加が予想されることから、2022/23年度より3.5%増の6.8百万トンの見込み。

【需要状況】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、前年度より9.0%増の2.6百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、前年度より1.8%減の4.2百万トンの見込み。

カナダ穀物委員会(Canadian Grain Commission)によれば、2022/23年度(2022年8月～2023年7月)のうち、2022年8～11月の輸出量は168.4万トンで、国別では、中国(76.5万トン)向けが半分近くを占め、続いて、イタリア(21.9万トン)、アルジェリア(14.8万トン)の順である。新穀の収穫を受け、11月の輸出量は103.8万トンと8～10月の64.6万トンから大きく増加した。うち、中国向けの輸出が44.3万トンである。

大豆－カナダ

(単位：百万トン)

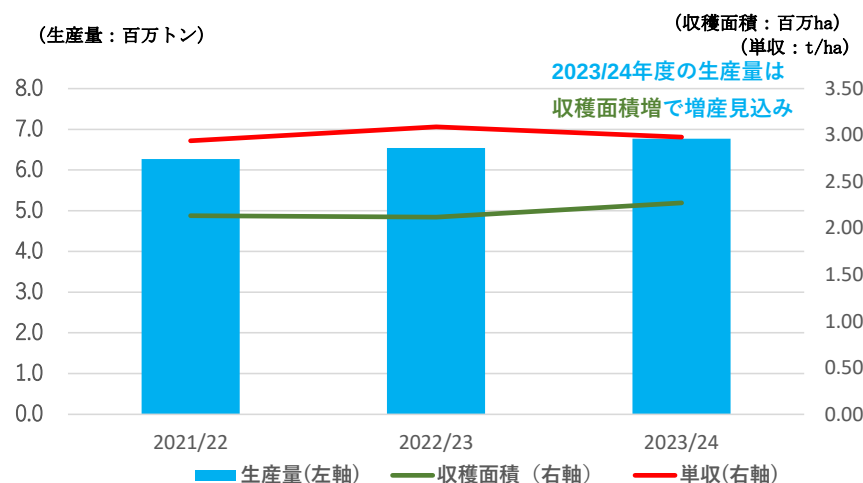
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年8月～23年7月)		
			予測値、()はAAFC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	6.4	6.3	6.5 (6.5)	-	4.3
消費量	2.5	2.4	2.6 (2.5)	-	9.0
うち搾油用	1.6	1.8	1.9 (1.9)	-	0.3
輸出量	4.7	4.3	4.2 (4.4)	-	▲ 1.8
輸入量	0.5	0.5	0.5 (0.4)	-	▲ 7.6
期末在庫量	0.3	0.4	0.7 (0.4)	-	52.1
期末在庫率	4.1%	6.4%	9.5% (5.1%)	-	3.1
(参考)					
収穫面積(百万ha)	2.04	2.13	2.12 (2.12)	-	▲ 0.5
単収(t/ha)	3.12	2.94	3.09 (3.09)	-	5.1

資料：USDA「PS&D」

「World Agricultural Production」(12 January 2023)

AAFC「Outlook for Principal Field Crops」(20 January 2023)

図：カナダの直近3か年の生産量等の推移



資料：AAFC「Outlook for Principal Field Crops」(2023.1.20)をもとに農林水産省にて作成。

(参考1)本レポートに使用されている各国の穀物年度について (2022/23年度)

	小麦	とうもろこし	コメ	大豆
米国	22年6月～23年5月	22年9月～23年8月	22年8月～23年7月	22年9月～23年8月
カナダ	22年8月～23年7月			22年8月～23年7月
豪州	22年10月～23年9月		23年3月～24年2月	
EU	22年7月～23年6月	22年10月～23年9月		
中国	22年7月～23年6月	22年10月～23年9月	22年7月～23年6月	22年10月～23年9月
ロシア	22年7月～23年6月	22年10月～23年9月		22年9月～23年8月
ウクライナ	22年7月～23年6月	22年10月～23年9月		
ブラジル		23年3月～24年2月	23年4月～24年3月	22年10月～23年9月
アルゼンチン	22年12月～23年11月	23年3月～24年2月		22年10月～23年9月
タイ			23年1月～12月	
インド	22年4月～23年3月		22年10月～23年9月	
ベトナム			23年1月～12月	

注 市場年度は、おおむね各国で作物が収穫される時期を期首として各国ごとに設定されているため、国、作物によって年度の開始月は異なります。
 例えば、2022/23年度は、米国の小麦では2022年6月～2023年5月、ブラジルのとうもろこしでは2023年3月～2024年2月です。
 なお、各国別、作物別の市場年度は、米国農務省によります。
<https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/downloads> (「Reference Data」タブを参照)

(参考2)単位換算表

1 容積→重量

1 Bushel (ブッシェル) (穀物により異なる)	0.027216	メトリクトン	小麦、大豆	米国等
	0.021772	メトリクトン	大麦	
	0.025401	メトリクトン	とうもろこし	
	0.014515	メトリクトン	オーツ	
1 CWT(百ポンド)	0.045359	メトリクトン	コメ	米国等

2 面積

1Acre(エーカー)	0.040469	ヘクタール	米国等
1rai(ライ)	0.16	ヘクタール	タイ
1 亩(ムー)	0.0667	ヘクタール	中国

3 その他

1ガロン	4.536	リットル	英国
1ガロン	3.785	リットル	米国
1LAKH(ラック)	10万	位取り	インド
1斤	500g	重量	中国
華氏→摂氏 : °C = (° F - 32) ÷ 1.8			

【利用上の注意】

食料安全保障月報は、国際穀物需給に関し、在外公館からの情報、農林水産省が独自に各国の現地コンサルタント等を通じて入手した情報、公的機関（各国政府機関、FAO、IGC 等）の公表資料、Oil World 等民間の調査会社から購入した資料、その他、商社情報や新聞情報等から入手した情報を農林水産省の担当者において検証、整理、分析したものです。

○ 本月報に記載のない情報は以下を参照願います。

（１） 農林水産省の情報

ア 我が国の食料需給表や食品価格、国内生産等に関する情報

- ・ 食料需給表：<http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/fbs/>
- ・ 食品の価格動向：<http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/anpo/kouri/index.html>
- ・ 米に関するマンスリーレポート：<http://www.maff.go.jp/j/seisan/keikaku/soukatu/mr.html>

イ 中・長期見通しに関する情報

- ・ 食料需給見通し（農林水産政策研究所）：<http://www.maff.go.jp/primaff/seika/jyukyu.html>

（２） 農林水産関係機関の情報（ALIC の情報サイト）：<https://www.alic.go.jp/>

- ・ 砂糖、でんぷん：<https://www.alic.go.jp/sugar/index.html>
- ・ 野菜：<https://www.alic.go.jp/vegetable/index.html>
- ・ 畜産物：<https://www.alic.go.jp/livestock/index.html>

（３） その他海外の機関（英語及び各国語となります）

ア 国際機関

- ・ 国連食糧農業機関（FAO）：<https://www.fao.org/home/en>
- ・ 国際穀物理事会（IGC）：<https://www.igc.int/en/default.aspx>
- ・ 経済協力開発機構（OECD）（農業分野）：<https://www.oecd.org/agriculture/>
- ・ 農業市場情報システム（AMIS）：<http://www.amis-outlook.org/>

イ 各国の農業関係機関（代表的なものです）

- ・ 米国農務省（USDA）：<https://www.usda.gov/>
- ・ ブラジル食料供給公社（CONAB）：<https://www.conab.gov.br/>
- ・ カナダ農務農産食品省（AAFC）：<https://agriculture.canada.ca/en/sector/crops/reports-statistics>
- ・ 豪州農業資源経済科学局（ABARES）：<http://www.agriculture.gov.au/abares>

○ 食料安全保障月報で使用している統計数値は、主に米国農務省が 2023 年 1 月中旬までに発表した情報を引用しています。

さらに詳細なデータ等が必要な場合は、米国農務省のホームページを参照願います。

http://www.usda.gov/wps/portal/usda/usdahome?navid=AGENCY_REPORTS

主な参考資料

「World Agricultural Supply and Demand Estimates」

<http://www.usda.gov/oce/commodity/wasde/>

「Grain : World Markets and Trade」

<https://www.fas.usda.gov/data/grain-world-markets-and-trade>

「Oilseeds : World Markets and Trade」

<https://www.fas.usda.gov/data/oilseeds-world-markets-and-trade>

「World Agricultural Production」

<https://www.fas.usda.gov/data/world-agricultural-production>

「PS&D」

<https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/advQuery>

など

- **データは予測値であり、毎月各種データの更新を受けて改訂されます**ので留意してください。
- 資料原典で表示されるブッシェル及びエーカー等の単位は、それぞれトン及びヘクタールに換算して記載しています。
- 資料原典において現地通貨で表示される金額を円換算するにあたっては、日本銀行国際局・財務大臣公示の基準外国為替相場及び裁定外国為替相場等の換算レートを用いています。
- 市場年度は、おおむね各国で作物が収穫される時期を期首として各国ごとに設定されているため、国、作物によって年度の開始月は異なります。
なお、各国別、作物別の市場年度は、米国農務省によります。
<https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/downloads>
(注：同サイトの「Reference Data」を参照)
- 期末在庫率の対前年度増減率の欄は、前年度とのポイント差になります。なお、表示単位以下の数値により計算しているため、表上では合わない場合があります。
- 本資料の引用等につきましては、出所（農林水産省発行「食料安全保障月報」）を併記願います。

なお、生産見通し等の予測は、各国国際機関及び各国の農業機関によりそれぞれの分析手法に基づき行われるため、機関によってデータの相違がある場合があります。また、各国の農業機関の公表を受けて、国際機関の見通しが改訂される場合があります。

英国については、2020 年 1 月 31 日付けで EU を離脱しました。英国の小麦に関する情報については小麦の EU27+英国のコーナーで取り扱います。

- 本月報の電子版は下記アドレスでご覧になれます。

農林水産省 食料安全保障月報

http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/jki/j_rep/index.html

- 本資料に関するご質問、ご意見等は、下記までお願いします。

連絡先	農林水産省大臣官房政策課食料安全保障室 TEL : 03-6744-2368 (直通)
------------	--